5. 昭和初期の気仙沼大島における遠洋漁業の漁撈習俗と信仰圏

――万亀丸・共栄丸の水揚帳を事例として――

Customs and Beliefs concerning Deep-sea Fishing in Kesennuma-Oshima in the Early Showa Era:

A view from catch record books of the *Banki-maru* and *Kyoei-maru ships*

小野寺 佑紀

ONODERA Yuki

要　　旨

ごせんぞさまは　岩うえ　海の神さま　まつられた。
　　海が　どこまで　見えるから、ここに　お宮を　たてられた。
　　おきから　吹く風　つよいから、 おやねに　石を　のせられた。
にわかの　あらしに　どの舟も、木の葉みたいに　もまれてた。
　　おれた　ほばしら、おれた　かい　波に　さかなも　さらわれた。
　　おじさんたちを　しっかりと　海の神さま　まもられた。
　　そうして　みんなの　たましいを　つよく　きたえて　くだされた。
　　どんな　なんぎも　おそれない　つよい　こころを　くだされた。

（『水上不二詩集 海はいのちのみなもと』より抜粋）

郷土の詩人水上不二は「海の神さま」と題した、このような詩をよんでいる。

本稿は民俗学の視座から、気仙沼大島における遠洋漁業の歴史的変遷について、昭和初期のカツオ漁船の水揚帳を手掛かりとしながら、当時のカツオ漁船の漁撈習俗や信仰圏などについて、その一端を明らかにすることを目的としている。

その対象として、国立研究開発法人中央水産研究所図書資料館所蔵の「村上茂夫家文書（大要害家文書）」に含まれる「小山文市家文書（小田中山家文書）」を資料として用いる。小田中山家では、和船時代からカツオ漁業を営み、機械船時代に入ると昭和6（1931）年から昭和13（1938）年にかけて「万亀丸」と「共栄丸」の2隻を経営している。

本稿では、これらの水揚帳の費目から参詣費について取り挙げながら、漁撈の予祝儀礼や寺社への参詣などの実態について考察を試みた。また、地区内の石碑や供養碑などの信仰物や、聞き書きなどの口碑伝承を基にしながら、大島漁協文庫に所蔵される「大島漁協文書」、「大島村役場文書」などの震災救出資料も活用した。水揚帳を用いた漁撈信仰へのアプローチが、今後の気仙沼大島をはじめ三陸沿岸の漁撈文化研究の一助となれば幸いである。

【キーワード】　水揚帳、漁撈習俗、遠隔地信仰、カツオ漁

1. はじめに

小山家〈屋号：小田中山〉は、浅根地区中山集落の小山姓の本家筋にあたる旧家で、廻舘地区の小山家〈屋号：外畑〉の古い分家筋にあたる。同家では近世中期頃から昭和初期にわたって、同族を中心として近海や沿岸地先で漁業経営を行っていた。

前述の通り、本研究で用いる資料は中央水産研究所に所蔵されている「村上茂夫家文書（大要害家文書）」の資料群に含まれる「小山文市家文書（小田中山家文書）」を対象としている。

当該資料は、昭和 24（1949）年から昭和 29（1954）年にかけて、新漁業法の制定に伴って、当時の水産庁が日本常民文化研究所（以下、常民研）に委託した「漁業制度資料調査保全事業」の一環として収集された漁業制度資料である。

この事業は、全国各地の漁業協同組合や旧家に保存されていた「漁業制度資料」の調査と収集を行なって、近世から近現代における漁業制度や漁村の実態を研究する目的で行われた。気仙沼地方には、昭和 24（1949）年 8 月に宇野脩平氏が単身訪れており、旧本吉郡大島村をはじめ同郡大谷村・唐桑村などの旧家を訪問している。

その成果として、宇野は唐桑村鮪立の鈴木國雄家〈古館家〉文書を翻刻し、昭和 30（1955）年に『陸前唐桑の史料』を刊行している。当地においては村役場や漁協をはじめ、島内の有力な旧家である小野寺家〈駒形〉、小山家〈外畑〉、小野寺家〈大向〉などを訪れており、この時に小山家〈小田中山〉からも資料が収集されている。昭和 25（1950）年 3 月に、常民研から刊行された『漁業制度資料目録』第 1 集・全国篇Ⅰには、「本吉郡大島村小山文市家文書」として 14 点が目録に登載されている（表 1）。

表 1　小山文市家文書

No	標　　題	年月日	西　暦	内　　容	型式	冊数
1	漁船納屋出入帳	T 6/5	1917		横帳	1
2	漁船納屋出入帳	T 7/1-7/2	1918	大正 7 年 9 月秋魚大網鮪網大漁の出入帳が記せらる。	横帳	1
3	漁船納屋出入帳	T 8/1	1919		横帳	1
4	漁船鰹納屋出入帳	T 9	1920		横帳	1
5	漁船鰹納屋出入帳	T13	1924		横帳	1
6	漁船鰹納屋出入帳	T14-S4	1925-29		横帳	1
7	鰹船大漁経営帳	S 7	1932		洋綴	1
8	鰹船大漁経営帳	S 7	1932	共栄丸に於ける会計	洋綴	1
9	漁船大漁経営帳	S 8	1933	中山商店会計簿	洋綴	1
10	漁船大漁経営帳	S 9	1934	共栄丸会計簿	洋綴	1
11	漁船大漁経営帳	S10	1935	共栄丸会計簿	洋綴	1
12	漁船大漁経営帳	S11	1936	共栄丸会計簿	洋綴	1
13	漁船大漁経営帳	S12-13	1937-38	共栄丸会計簿	洋綴	1
14	本吉北方村寫覚　但し本地新田おぼえ				横帳	1

『漁業制度資料目録』第 1 集全国篇Ⅰ（1950）より転載。

その他に同目録には、旧大島村の資料として「大島村役場文書」（8 点）、「大島漁業協同組合文書」（11 点）、「村上茂夫〈大要害〉家文書」（659 点）、「小野寺廣〈大向〉家文書」（48 点）、「菅原彦太郎〈発句〉家文書」（3 点）の計 5 件（729 点）が収録されている。

この内、村上茂夫家文書を除く 4 件は、昭和 50（1975）年代に常民研によって原資料保存者のもとに返却されている。しかしながら「小山文市家文書」については、中央水産研究所が所蔵する「村上茂夫家文書」の資料群の中に含まれており、現在も混在した状態で保存されている。

漁業制度資料の返却などの詳しい経緯については、網野善彦著『古文書返却の旅―戦後史学史の一齣―』（中央公論新社、1999）に詳しい。

2. 小田中山（こだなかやま）家の漁船経営

前述した通り、小田中山家では近世中期頃から昭和初期にわたって、地縁や同族を中心としたカツオ漁やサメ網漁、カツオ節や魚肥の製造などの漁業経営を行なっていた。

外畑家の言い伝えによれば、小山家親類〈外畑家・小田中山家・大水ノ下家〉の3軒で漁網を三つに分けて、それぞれの家が別れたという伝承がある。

このような言い伝えがあるように、同家では和船時代からカツオ漁船の経営を行なっており、大正5（1916）年には発動機据付漁船「宝栄丸」（木造・11トン）を、大正11（1922）年6月には「鶴栄丸」（西洋型・18トン）を建造している。宝栄丸はサメ網漁船として、大正5（1916）年から昭和5（1930）年にかけて経営された。

その後、昭和5（1930）年からは「万亀丸」、同7（1932）年には「共栄丸」と2隻のカツオ船を経営している。この2隻の水揚げの実態については、「漁船大漁経営帳」や「鰹船大漁経営帳」という標題の記帳欄が印刷された会計帳簿に記録されている（図1）。

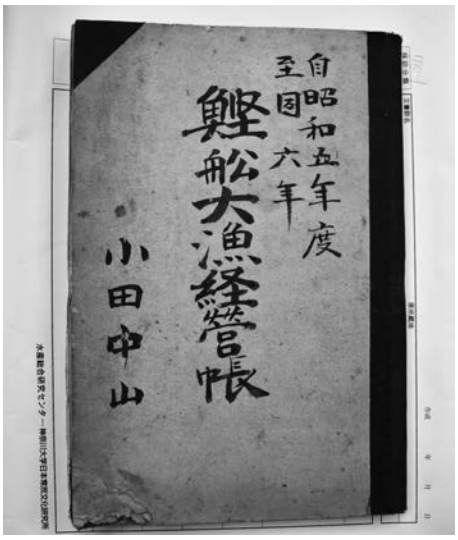

図1　鰹船大漁経営帳
（中央水産研究所所蔵）

この水揚げに関する帳簿について、本稿では「水揚帳」と表記することとする。水揚帳は1年ごとに1冊作成され、カツオ節や魚肥を製造する鰹切納屋の「納屋ノ部」、4月から9月のカツオ漁の「カツオノ部」、冬期のマグロ延縄漁の「縄ノ部」と、それぞれの操業経費が費目ごとに整理され記されている。共栄丸の水揚帳については、昭和7（1932）年から昭和13（1938）年の6ヶ年分が記録として残されている。しかしながら、昭和12（1937）年8月に共栄丸は経営上の理由から売却されており、これについては後述したい。

1）小田中山納屋

和船時代からカツオ船を経営する家々では、カツオ節製造や作業小屋として浜辺に「鰹切納屋」を持っていた。小田中山家をはじめ、小野寺家〈駒形〉・小野寺家〈大向〉・村上家〈大要害〉・村上家〈山王〉・堺家〈浅根仁屋〉・白幡家〈韮之脇〉・小山家〈外畑〉などでは、季節労働として「納屋稼ぎ」で働く人を多く雇った。

昭和15（1940）年頃まで、磯草に外畑家と小田中山家の共同納屋があった。後に外畑家から、この納屋の跡地に別家となった小山良治家では「那谷」という屋号を付けている。

また、小田中山家では共同納屋の他に、小田の浜の小山家〈北小田〉の辺りに自家の鰹切納屋を持っていた。この納屋については、昭和8（1933）年の昭和三陸津波で流失している。

長崎生まれの小松みよ子さん〈大正13（1924）年生まれ〉の証言によると、「朝間大きな地震があった。小山家〈北小田〉の下からダーンと大きな音がして、津波だと言って逃げた。実家〈水上家・かけ〉には90歳になる祖母がいて、たんまげて立たれなくなったので、兄弟でお祖母さんの肩を担いで、小山家〈茎〉や村上家〈上の山〉の方まで逃げて、津波が治まるまでそこにいた。その時、雪が降っていた。津波は実家〈かけ〉の下の方、今の「漁師のせがれ」の辺りまで来た。津波の後には、魚やホタテなどが、いっぱい寄っていて拾ったけども、砂や泥が着いていて誰も食べなかった。小田中山の鰹切納屋に2軒の家族が居た。その家には体の悪い年寄りがいて、その年寄りをおぶって逃げたと聞いた。どちらの家も津波に流されて、高台の別の場所へ移った。村上家〈小浜〉の下に大きな船が寄っていたのを憶えている」と、当時の様子を鮮明に語っていた。

この津波で被災した小田中山納屋の復旧については、昭和8（1933）年の「震嘯災害商工業復旧」（大島村役場文書）に詳細な記録が残されている。

同資料によれば、小田中山家では木造平屋建て55坪あった工場（鰹切納屋）が流出したため、県の補助金交付に対して、復旧資金の貸付400円を申請している。補助金交付申請書によれば、新たに盛土をした基礎の上に、40坪（縦4間・横10間）の工場の再建を計画している（表2）。業種としては海産物製造とあり、カツオ節の他、魚肥の製造などを行っていた（図2）。

表２　小田中山納屋の補助申請備品

No	設備	被害前の数量	補助申請の数量
1	建物坪数	55坪	40坪
2	煮釜	3基	4基
3	煮籠	90	90
4	セイロ	600	800
5	冷櫃	4	6
6	肥料溜	4	4
7	メ胴	1	1
8	ジャック	1	1
9	包丁	10	10

「震嘯災害商工業復旧」（昭和8年・大島村役場文書）を基に作成。

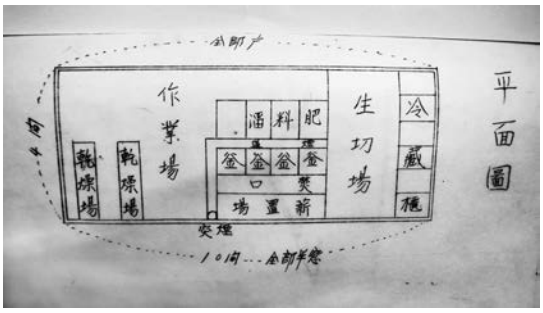

図２　小田中山納屋設計図（大島村役場文書）

２）万亀丸

昭和5（1930）年頃に静岡県焼津市から移入された木造中古船で、高井の小野寺新作翁が仲介にあたっている。水揚帳の記録から推察すると、昭和5（1930）年から昭和9（1934）年にかけて操業しており、漁期ごとに「カツオノ部」と「縄ノ部」に項目が分けられている（図3）。昭和9（1934）年以降の動向については不明であるが、昭和10（1935）年の「漁船大漁経営帳　共栄丸」には「万亀丸諸ヒ」という費目があり、「9月21日　金七円二十銭　登記ヒ用　金二十円　新作ニ礼金」、「11月18日　新作ニ旅ヒ」、「12月29日 金十七円二十五銭 女川行旅ヒ」などと記載がある。

おそらく、昭和10（1935）年に小野寺新作を仲介者として、宮城県牡鹿郡方面の漁業者に売却された可能性が高い。

３）共栄丸

気仙沼地方では初の機械鉄鋼船（総屯数90トン）で、当時としては最先端の無線電信施設とソリット式ディーゼル機関（150馬力）を完備していた。

昭和5（1930）年に大島村議会では、失業救済農山漁村臨時対策低利資金を県から村が借り受けて、村内の漁船経営者に貸与することを決議した。この資金は小田中山家ほか、10人の共同経営者に貸与されることとなり、共栄丸の建造が計画された。造船費用4万3千円の内7割は興業銀行が融資しており、同年6月には、船体を三菱彦島造船所（山口県下関市）に、ディーゼル機関を新潟鐵工所にそ

表３　共栄丸の経営費　（単位：円）

年　代	水揚金	船掛り	水夫歩合	償却及保険	計	利益
昭和　6年	6,474.22	5,775.84	2,810.85	257.81	8,844.50	△ 2.370.28
昭和　7年	33,471.80	16,065.12	10,874.29	5,346.07	32,285.48	1,186.32
昭和　8年	53,546.46	19,811.72	16,432.51	12,312.43	48,557.66	4,988.81
昭和　9年	53,723.12	24,473.55	14,443.53	11,817.01	50,734.09	2,989.03
昭和10年	52,415.03	26,789.11	14,668.51	8,358.23	49,815.85	2,599.18

（昭和11年～12年起債及貸付書類「大島村役場文書」を基に作成）

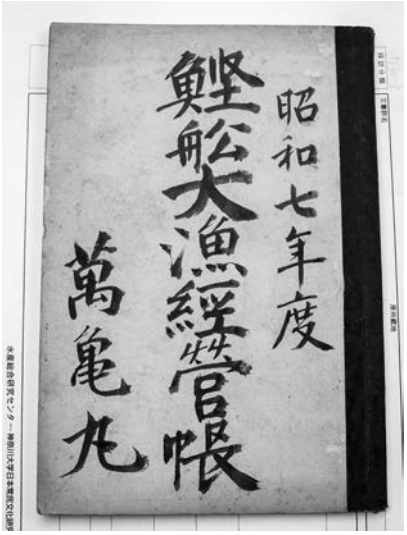

図３　万亀丸の水揚帳（中央水産研究所所蔵）

れぞれ発注し、昭和6（1931）年9月に大島へ回航された（表3）。

水揚帳の記録から共栄丸は、昭和7（1932）年から昭和13（1938）年にかけて操業している。特に昭和8（1933）年は、前川稲四郎船長が南方漁場に進出するなどして、1航海で約3万6千円の水揚げを記録し、大きな話題となっている（図4）。

図4　共栄丸の操業の様子（『大島誌』より転載）

昭和8（1933）年12月7日の大気新聞には、「鰹漁に於て四萬五千円の水揚げを示し地方一の折紙をつけられた大島村小山文市氏所有の共栄丸は秋期漁に於ても断然他を圧し五日午後に金華山東□北四百八十浬から五百廿浬の海区に於て大小交じりの尾長鮪千七百余尾、女梶木八本、金□三枚、鰹百尾を漁獲當町に入港し約三千五百圓を突破した傳へられてゐる」とあり、当時の盛況ぶりがまざまざと伺える。

また、同紙面によると「當町三日町小野寺染工場で製作されたが此製作主は別項の如く地方一の豊漁をした大島村の共栄丸船主小山文市氏が五十六反と、同村の清壽丸船主が五十三反、やがてこれが島のアネコの手で縫ひあげられ揃姿で宮詣りの日が来れば情熱的な島娘の心を一層強く引きつけるであろう」とあり、共栄丸の切り上げには、染カンバン用の反物が56反注文されたとある。

図5　染カンバン（下之平家所蔵）

ちなみに53反を注文している清壽丸は、崎浜の村上家〈下之平〉が経営したカツオ船で、万亀丸と同じく焼津からの移入船である。

この「染カンバン」について、同年12月23日の記事によれば「「染かんばん」が何年振りかで過日大島村の小山文市氏が所有船共栄丸の乗組員につくってくれた。それを見た他の船の乗組員は今更忘れてゐた愛人にでも會ったやうに懐舊の念がヒシヒシと迫って来るのを覚えた。今年の鰹漁は近年稀な豊漁であった。船主も船員も「大漁祝」をすべくその祝ひ方法を選択してゐた折柄この「染かんばん」の姿を見て一様に「之れに限る。之を除いて漁夫の華とすべきものがない」といふことに決定した」とある（図5）。

当時は大漁時においても、染カンバンをあまり仕立てなかった様子だったらしく、共栄丸がもたらした記録的な水揚げは漁港に活気を与えただけではなく、下降傾向にあった港町の文化の再興にも一躍貢献していたことが、当時の新聞報道からも伺える。

しかし、昭和12（1937）年8月、共栄丸は福島県小名浜の東日本水産有限会社に売却された。その後、「第2東日本丸」と船名を改められたが、船頭の小山常治をはじめ船員はそのまま乗組員として乗船し、一応の雇用は確保されている。

前述した通り、共栄丸の水揚帳は昭和13（1938）年まで記帳されていることから、船員がそのまま雇用されたため、おそらく経理業務も引き継がれたと考えられる。

昭和12（1937）年から同13（1938）年分の水揚帳は合冊になっており、完全に経営が移行されたのは、昭和14（1939）年からだと推測される（表4）。

表４　共栄丸の操業費目

費　目	金　　額	項　　目	金　　額
【1】入料		【2】水揚げ（16 航海）	25.430 円 52 銭
1. 参詣費	182 円 20 銭	三崎　（神奈川県）	
2. 船具費	5.693 円 80 銭	銚子・勝浦　（千葉県）	
3. 漁具費	3.648 円	塩釜・石巻　（宮城県）	
4. 通信費	485 円 93 銭	宮古　（岩手県）	
5. 餌代	3.423 円 69 銭	沖尋	267 円 11 銭
6. 氷代	1.461 円 47 銭		
7. 石油代	6.151 円 40 銭	【3】当り金	272 円 14 銭
8. 機関費	1.989 円 14 銭	船元	194 円 10 銭
9. 主食費	1.944 円 44 銭	船頭	283 円 83 銭
10. 副食費	453 円 15 銭	通信士	350 円
11. 諸雑費	362 円 57 銭	船長	136 円
12. 経営費	876 円 19 銭	船長手当	100 円

「漁船大漁経営帳　共栄丸（昭和十二年ヨリ同十三年マデ）」（小田中山家文書）を基に作成。

その後、昭和 16（1941）年 8 月 22 日に第 2 東日本丸は、海軍の特設艦船として監視艇に徴用された。戦禍を経た後、昭和 20（1945）年に 12 月 31 日に解用され、翌 21（1946）年から 10 年間ほどカツオ漁船として経営されたという。

小松宗夫によれば、第 2 東日本丸と大島船員の活躍は、その当時イワシ揚繰網やトロール漁の不振で困窮をしていた小名浜地域の漁業を、カツオ・マグロ漁業に転換させるとともに、戦後になって多くの大島出身の船員たちが、福島船籍の遠洋漁船に乗り込むきっかけとなったという［小松　1974：p 309］。

4）漁期

和船時代の大島のカツオ漁は、旧暦の 5 月の田植え過ぎから出漁仕度を行なった後に、金華山や塩釜神社を参詣してから、金華山沖から操業が始まった。

その後は岩手県の綾里沖まで北上して、最盛期の土用の頃には、大島の黒崎沖や唐桑沖が漁場となった。終漁時期は大島神社の祭典日にあたる旧 9 月 15 日頃で、神輿の船渡御にカツオ船が加わる習わしだった。戦前の一本釣りカツオ船は、旧 4 月 8 日の久須師神社の祭典前後に出港して、金華山を参詣しながら南下し、三崎や銚子を根拠地として南方海域で操業しながら、カツオの魚群を追って北上する。旧 9 月 15 日の大島神社の祭典頃には、三陸沖まで達して終漁となったという［千葉　2011：p 256］。

水揚帳をみると、その漁期は 5 月から 9 月にかけてカツオの一本釣り漁を行なっており、神奈川県の三崎から東京湾周辺、千葉県の館山・勝浦・銚子を北上して、福島県の小名浜、宮城県の塩釜・石巻・女川・気仙沼、岩手県の大船渡・宮古・大槌・釜石、青森県の八戸まで水揚げしている。その後、11 月から 2 月にかけては、裏作としてマグロ延縄漁を行なっている。和船時代と昭和初期の機械船時代では漁場に違いがあるものの、春から秋にかけてのカツオ漁と、冬の延縄漁という操業形態に関してはあまり大きな違いはみられない（表 5）。

表５　和船時代の大島の漁業暦

時　　季	漁　　種
冬至から翌年の八十八夜まで	メヌケ縄漁・サメ網漁・アカウオ縄漁
八十八夜から 1 ヶ月半	シラス網漁・メダカ縄・カツオ漁・イワシ漁
秋の麦まきの頃まで	カツオ漁
土用中から冬至まで	ドンコ縄漁・冬イワシ網・スルメ釣り

『大島誌』（1982）を基に作成。

3. 水揚帳と参詣費

「水揚帳」とは、『日本国語大辞典』（第 2 版・1972）によると（1）「商家で、その日の売上げを記す帳面」、（2）「遊里で、遊女の日々の売上げを記入する帳面」とある。

本稿で用いる「水揚帳」の場合には、漁業経営者が漁獲物の水揚げ額や、餌代や燃油代などの諸費用を記録した金銭出納帳簿を指している。

前述のように、水揚帳には「納屋ノ部」、「カツオノ部」、「縄ノ部」といった項目があり、「餌料」、「氷代」、「漁具費」といった様々な費目に分けられているが、「参詣費」がその最初に出てくる（表 6）。費目としては、出船参詣や寄港地の寺社へ参拝する際の賽銭や御札代、またはお神酒代やオヒマチ（お日待ち）、オツヤ（お通夜）などの費用として「参詣費」が支出されている（図 6）。

表６　万亀丸の参詣費（昭和８年）

カツオノ部			縄ノ部		
4/ 8	少林寺祈禱会ニ	3 円	11/ 2	村社参詣費	4 円 50 銭
4/ 9	御膳金村社、波切様	4 円 50 銭	11/ 2	餅米、サトー代	4 円
4/ 9	御日祭ノ酒及米其他	13 円 10 銭	11/25	村社参詣ヒ	25 銭
4/23	成田山御膳金	2 円 20 銭	2/14	成田山　〃	1 円
5/ 2	金比羅山　〃	2 円 10 銭		御日祭酒代	5 円 50 銭
5/14	御昼夜ノ掛リ	2 円 50 銭			15 円 25 銭
5/31	御施餓鬼ニ	50 銭		魚代	50 銭
5/12	金華山御膳金	10 円 10 銭		御日待米御賽銭	1 円 80 銭
〃	金華山御守札	3 円 10 銭			
〃	出舟祈禱料	1 円			計 17 円 55 銭
〃	竹駒社御膳	7 円 20 銭			
〃	青麻社　〃	13 円 55 銭			
〃	塩釜社　〃	14 円　5 銭			
5/17	鎌倉社　〃	5 円			
7/ 1	祈禱料	2 円　5 銭			
8/ 8	御崎様御膳金	10 円 50 銭			
		計 94 円 49 銭			
	村社根魚代	2 円			
		計 96 円 50 銭			

「漁船大漁経営帳 中山商店」（小田中山家文書）を基に作成。

図６　水揚帳の参詣費（中央水産研究所所蔵）

特に寺社への参詣金は「御膳金」と書かれることが多く、「金華山御膳金」や「御膳金、村社、長命、西光分」などと記載がある。『和船の海』によれば「金華山は女人禁制で巫女すら居らず護摩焚き後のご馳走もすべて男の人が料理を作りました。適当にご馳走になりますと神主にお礼をのべ山を降ります。ここでも飲み残りのお酒を「はちこ」に入れて持返り、留守の人達に分けるのでした」［小山　1973：p 25-26］とある。おそらく、昔は祈禱を行なった後、直会の御膳代なども含めて「御膳金」として納めていたと思われる。現在でも光明寺の波切不動や大島神社の前夜祭など、参拝の際に御膳や酒などを振る舞う習慣は続いている。

１）和船以来の漁業慣習と参詣費

『海鳴りの記』に所収の第７大和丸（気仙沼・酢屋）の船元をした菅原家〈松小山〉の水揚帳の記録によると、明治 43（1910）年の操業経費 495 円 32 銭の内、30 円が参詣金として計上されている。その具体的な参詣地などについては記されてないが、米代・餌代・漁具代に次いで、全体の経費の内 6% が参詣金（参詣費）に充てられている（表７）。

和船時代の様々な慣習は、機械船時代になっても続いており、特に封建的な雇用関係は、隷属的な関係性もはらんでいた。大島でも近代的な労使関係を確立するために、当時の菅原熊治郎村長は昭和 11（1936）年に「大島村水産業親興会」を結成している。

その協定事項の１条目には「一　初穂料ハ村社ハ三円他ノ村内神社寺院ニハ二円トス」とあり、参詣費に関連した規定が提示されている。

菅原村長は、和船以来の慣習であった時季や漁期ごとに支出される村内の寺社への過分な参詣費を少額にして、その余分を入港貯金や設備投資に充てることで、漁船経営を安定化させることを考えていたと思われる。

とりわけ、当時の船員の多くは船主や船元から借金を負っており、菅原村政下では多様な施策によって、僅かでも船員の給与に還元させることを目標としていた。たとえば、大正 15（1926）年２月 26 日の村会協議案には、「5　船内ニ共同的貯金ヲ奨励シテ本年鰹漁船ヨリ実行スルコト」とあり、船員の共同貯金を奨励している。

表７　第７大和丸の水揚記録

収入	取り揚げ魚代	875 円 45 銭
支出	（1）船員歩合	380 円 13 銭
	（2）操業経費	495 円 32 銭
		【内訳】
	白米 24 俵	175 円余
	麦３俵	約 10 円
	味噌・醤油・塩	約 10 円
	餌イワシ代	175 円
	漁具	41 円
	薪代	15 円
	参詣金	30 円

『海鳴りの記』（1973）を基に作成。

しかしながら、共栄丸の参詣費を見ると「四／一二　金五円　崎祭御初穂」（昭和11年・共栄丸）、「四／一五　金四円五十銭　村社御膳金」（昭和13年・共栄丸）などとあり、出船や入港時には、村内の寺社に参詣費が支出されており、協定事項の方針通りには改善されなかったことが伺える。

2）参詣費の特徴

当時のカツオ漁船の場合、出船参詣やオヒマチなど乗組員のみで行う場合と、お籠りや操業中の代参など乗組員の家族が行う場合のふたつに分けられる。前者は、同じ船に乗り組んでいることに依拠する講組織のようなもので、一つの信仰集団が形成されている。たとえば、大島神社には昭和6（1931）年に「万亀丸鰹船船中」によって奉納されたカツオの絵馬が拝殿に掲げられている。

また、船主（船元）・船頭・船員・餌買人といった職制ごとに、それぞれが参詣に訪れる範囲や分担が別れている事例もみられる。一方、後者は出船前後や操業中に乗組員の家族（主に婦人）が集まって、お籠りや代参などを行なって大漁祈願や航海安全などを祈願する。これも夫や舅が同じ船に乗り組んでいることに依拠している一つの信仰集団であり、不幸にも海難事故が発生した場合には、施餓鬼供養の祭祀者となる表裏一体の機能も持ち合せている。

また、これとは別で個々の信仰や良心に基づいて参詣する場合もあり、個人の信仰が漁獲や漁場の予測、海上での様々な出来事などをきっかけに、流行神として他の船員や家族にも派生する事例もみられる。何れにしろ、同じ年代や地域によっても各漁船や個人によって異なっている。

万亀丸と共栄丸の事例では、昭和5（1930）年から昭和13（1938）年までの8年に及ぶ水揚帳から参詣費の内訳を類型化してみると、①「予祝行事・年中行事」、②「氏神・村内参詣」、③「遠隔地・寄港地での代参」といった三つに大別することができる（表8、表9）。それぞれの内容について具体的に紹介しながら、若干の考察を加えてみたい。

4. 予祝行事・年中行事

オヒマチ（お日待ち）、オツヤ（お通夜）などで用いる餅米や砂糖・お神酒などをはじめ、神仏に供えるネネウオ（根魚）などに対する支出も参詣費に含まれている。

これらは豊漁や航海安全を祈願する予祝行事として捉えられており、出船参詣での賽銭（御初穂）、奉納する船名旗（御旗布）をはじめ、大島神社の例祭（御下がり）の際に設けられるハタバ（旗場）の費用なども含まれている。

このほかにも、海難事故の犠牲者を弔う御施餓鬼（ハマアライ）や、小正月のモノマネ行事なども含まれている。これらの様々な予祝行事や儀礼は、神仏に対しての祈りであると同時に、船主と船頭、乗組員とその家族同士の結束を高める重要な側面を持っていた。

1）オヒマチ（御日待ち）

出船前にフナカタ（船方）を集めて神仏を参詣し、操業時の櫓割分担や日程などを決めた後に、座敷で酒宴を行なうことを「オヒマチ（御日待ち）」や「カクゾロエ（水主揃え）」と言う。

たとえば、参詣費には「四／二五　金十五円七十銭　御日待入ヒ」（昭和5年・万亀丸）、「二／二八　金十二円十三銭　御日酒其他」（昭和9年・共栄丸）などとある。

『気仙沼市史』Ⅶ・民俗宗教編によれば、「オヒマチは、漁期前の三月末ころと漁期終了後に、船主や船頭の家で年に二回行う。漁期始めのオヒマチをヌッタツのオヒマチ、漁期終了後のオヒマチ

表８　万亀丸の参詣費

昭和５年（1930）		
4/13	村社、長命寺、西光寺	10円
4/25	御賽銭及酒代	3円20銭
4/25	波切様御膳金	2円10銭
4/25	御日待入ヒ	15円70銭
5/ 6	御中夜入ヒ	2円70銭
7/18	金華山御膳金	11円65銭
	塩釜御膳金	14円80銭
	青麻山御膳金	18円17銭
	祈禱料、竹駒御膳金	1円、3円
	御札代、御崎様御膳金酒代	1円50銭、17円
	御祈禱料	1円
8/11	豊川様	20円
	祈禱料	4円20銭
	御船玉入	2円
	青麻山	2円
	室根山	2円
		計132円57銭
昭和６年（1931）		
4/18	御膳金三ヶ所分	11円50銭
4/23	崎祭御初穂	2円
4/20	御日祭ノ入料	11円85銭
4/23	村社ニ寄進	10円
5/15	御□□ノ入費	2円50銭
4/24	金華山ニ	10円20銭
4/26	塩釜神社ニ	13円70銭
4/26	青麻山ニ	12円40銭
4/26	竹駒様ニ	5円50銭
	外祈禱料	20銭（79円85銭）
	御神入、御祝銭	3円
	神山ニ	2円40銭
	御崎参詣金	10円35銭
	村社ニ寄進	10円
	村社根魚代	5円
11/ 7	成田山ニ	1円
	波切様ニ	1円50銭
		計123円10銭
昭和７年（1932）		
	御膳金 村社、長命寺、西光寺分	6円60銭
	モノマ子入ヒ	10円
	御神入ニ	2円65銭
5/ 5	光明寺御膳金	2円
7/ 2	金華山外参詣金	43円17銭
7/ 5	御崎様参詣金	10円20銭
9/ 5	祈禱料	1円
	赤イ岳参詣金	10円
	舘御膳金	5円
		計85円62銭

昭和８年（1933）		
カツオノ部		
4/ 8	少林寺祈禱会ニ	3円
4/ 9	御膳金村社、波切様	4円50銭
4/ 9	御日祭ノ酒及米其他	13円10銭
4/23	成田山御膳金	2円20銭
5/ 2	金比羅山　〃	2円10銭
5/14	御昼夜ノ掛リニ	2円50銭
5/31	御施餓鬼ニ	50銭
5/12	金華山御膳金	10円10銭
〃	金華山御守札	3円10銭
〃	出舟祈禱料	1円
〃	竹駒社御膳	7円20銭
〃	青麻社　〃	13円55銭
〃	塩釜社　〃	14円 5銭
5/17	鎌倉社　〃	5円
7/ 1	祈禱料	2円 5銭
8/ 8	御崎様御膳金	10円50銭
		計94円49銭
	村社根魚代	2円
		計96円50銭
縄ノ部		
11/ 2	村社参詣費	4円50銭
11/ 2	餅米、サトー代	4円
11/25	村社参詣ヒ	25銭
2/14	成田山　〃	1円
	御日祭酒代	5円50銭
		15円25銭
	魚代	50銭
	御日待、米、御賽銭	1円80銭
		17円55銭
昭和９年（1934）		
9/10	御神入、御神酒、御祝儀	
9/10	御日祭酒、其他	
11/ 4	成田山参詣ニ	
10/ 6	大沢行	
12/31	御札詣、其他	
12/29	祈禱料（ママ）	
1/28	御旗及~~御初穂~~	
2/19	御初穂	
12/30	御賽銭	
2/18	御膳金御崎様	
2/18	村社御膳金	計25円40銭
3/31	御賽銭	

表９　共栄丸の参詣費

昭和７年（1932）			
	御膳金 村社、光明、長命、西光分	9円10銭	
	御膳金 大槌稲荷様	2円	
	御日待用米代	8円80銭	
	山形参詣用ニ	22円50銭	
4/18	金華山外ニ社参詣	39円70銭	
7/20	御崎様参詣	10円10銭	
8/14	御船玉祭り	2円	
8/19	波切様参詣	2円50銭	
9/ 3	キトー料	1円	101.700
1/30	成田山参詣金	40円	
昭和８年（1933）			
カツオノ部			
4/ 8	少林寺御祈禱会	5円	
4/ 9	御膳金三ヶ所分	6円50銭	
	御日祭用酒代	4円50銭	
	御昼夜ノヒ用	1円80銭	
	御施餓鬼ニ	50銭	
4/10	金華山、塩釜、青麻山	36円30銭	
4	青麻山行	2円44銭	
27	安房神社参詣	9円	
	村社根魚代	2円	
縄ノ部			
2/ 1	旗場ノ入ヒ	3円	
2/14	成田山ニ	2円	
2/28	御崎様参詣	13円5銭	
		18.5	
昭和９年（1934）			
4/ 1	西光寺御膳金	2円25銭	
2/28	御日祭用酒其他	12円18銭	
4/ 8	金華山御膳金	15円20銭	
4/ 9	塩釜御膳金	20円	
4/ 9	青麻山御膳金	14円70銭	
7/28	御崎様御膳金	14円30銭	

	村社ニ根魚代	5円
	船頭参詣金	30円
10/17	米其他御日待用	28円33銭
11/ 4	成田山参詣ニ	1円20銭
11/ 8	米其他浦組二	15円84銭
11/24	安房神社参詣	25円50銭
12/19	塩釜神社参詣	12円
1/26	祈禱料	50銭
2/19	御初穂及御旗布	1円50銭
2/18	村社御膳金	1円
2/17	御崎様	10円10銭
昭和10年（1935）		
4/ 2	光明寺西光寺御膳	5円
4/ 4	崎祭御初穂神山	5円
4/17	村社参詣費	2円
4/30	成田山御祈禱料	2円
5/ 5	善宝寺、善光寺、成田山ニ	25円
4/14	金華山塩釜青麻安房半僧坊 御膳金	82円17銭
5/21	成田山参詣金	23円
6/14	三ヶ処御膳金　旅ヒ	16円
7/ 1	祈禱料	2円
7/12	御崎様	16円
6/14	観音様	1円
7/12	御船玉祭り	2円
21	御祈禱料	1円
9/19	弁天様キフ	2円
		7人計18円70銭
10/13	金比羅神山祈禱	15円70銭
11/18	塩釜社御膳金	5円
1/18	御崎様参詣	16円
2/21	成田山参詣	15円
		計51円70銭
昭和11年（1936）		
4/ 4	光明寺御膳金	2円50銭
4/ 7	村社、成田山御膳金	5円50銭
4/11	伊左エ門神徒ニ	1円
4/12	崎祭御初穂	5円
4/ 1	金刀比羅山御膳金	2円20銭
5/14	守谷山参詣金	10円
5/29	観音寺様ニ	1円10銭
6/16	波切様ニ	1円
6/19	竹駒様ニ	5円
7/ 6	参詣用ニ	25銭
7/15	村社参詣	1円 5銭
4/13	参詣金旅ヒ共	49円50銭
5/13	参詣金旅ヒ共	14円50銭
6/ 8	参詣金旅ヒ共	16円32銭
6/16	参詣金旅ヒ共	8円
8/10	参詣金旅ヒ共	5円
8/25	参詣金旅ヒ共	5円
	大山参詣 船頭	20円
8/11	古峯山祈禱	2円50銭
8/22	船ノ祈禱料	1円50銭
10/27	□□□参詣	4円
		計156円92銭
10/30	御守札	1円
11/11	成田山ニ	1円10銭
11/11	村社ニ	50銭
11/19	天海和尚ニ	3円
11/27	守や様参詣ヒ	10円
11/20	神山ニ	5円
12/10	金比羅様其他	13円20銭
12/24	塩釜、竹駒山ニ	21円29銭
1/17	参詣金	10円60銭
		計65円9銭
3/10	御崎様参詣	10円50銭
	祝事参詣ニ	4円80銭
		計81円
3/18	女川参詣金	5円
昭和12年（1937）		
4/ 7	竹駒様ニ御祈禱料	3円50銭
4/10	成田山波切金比羅山 御膳金	7円50銭
4/25	村社及金比羅山ニ	4円50銭
	善宝寺参詣金 船頭	16円50銭
5/19	守や地蔵尊詣り	6円50銭
5/31	竹駒様参詣	5円
6/ 1	浅根御神ニ	2円
6/28	中信及御船玉□□□	4円50銭
4/30	金華山其他参詣金	66円30銭
4/30	神山祈禱料	5円
6/ 7	鹿島様参詣	13円90銭
7/ 3	御中昼ノ掛リ	3円90銭
7/13	稲荷様参詣	7円20銭
7/22	三光様ニ	50銭
7/24	御崎様参詣	23円20銭
8/ 3	金比羅山ニ	1円
8/27	御祈禱料二口	5円20銭
8/23	魚来観音様	1円
9/20	祈禱料	2円
10/18	根魚代、村社ニ	3円
		計182円 2銭
10/17	志波神社ニ参詣	15円
11/ 1	守屋様参詣	7円
10/31	神山ニ	6円
11/15	竹駒様ニ	5円50銭
2/20	神山ニ	1円20銭
		計34円70銭
2/28	鎌倉参詣	7円
		計41円70銭
昭和13年（1938）		
4/10	金比羅山御膳金	2円50銭
4/15	村社御膳金	4円30銭
4/18	御祈禱料金毘羅山	30銭
4/21	波切様	2円50銭
4/24	守や山	5円
4/30	神山乗出祭り	5円
5/10	魚来観音様ニ	1円
5/20	竹駒山其他祈禱ニ	5円80銭
6/16	参詣金	75銭
5/ 6	薬師様キフ	15円
	室根山ニ	3円
5/15	参詣金四ヶ所分	52円60銭
5/15	参詣金	2円
6/ 4	参詣金	7円78銭
6/26	参詣金誕生寺ニ	9円
7/25	御崎様参詣ニ	25銭50銭
		計140円 3銭
10/ 1	御神入酒代	1円
7/26	御神様ニ	2円
8/28	御船玉及酒代	3円
9/10	観音様	1円
		計150銭53銭
11/ 5	御日待及酒代共	11円50銭
11/ 1	村社ノクジ引ニ	50銭
11/19	成田山及祈禱料	2円50銭
		計14銭 5銭
12/27	御施餓鬼ニ	1円
1/ 5	村社参詣	1円10銭
12/27	参詣金	40円50銭
12/27	参詣金女川分	6円
		計63銭20銭
4/10	村社ニ	5円

（「小田中山家文書」）を基に筆者作成。

をキリアゲのオヒマチという。ヌッタツのオヒマチでは、主に初めて乗る人などを呼び出す。参詣のときは七人とか十一人とか奇数人数で歩くが、九人は避ける。時間は、早朝に集まり、昼過ぎに解散する。主な内容は、男だけで炊事をして食事をした後に神様参詣をする」［気仙沼市編さん委員会　1994　p 82-83］とある（図 7）。

また、崎浜の村上清太郎翁〈明治 26（1893）年―平成 2（1990）年〉の手記を翻刻した『村上清太郎翁漁業記録』（下）によれば、「旧五月節句の頃になると乗り出し、「入梅カツオ」を見るには、準備として先に祈願祭参詣に出回ります。二四時間、別に「おやわら」といって、火を清め、炊事用具など一切、外とは混同しません。「おひまつ」は神に海上安全、大漁祈願する行事で、参加者は身辺にけがれなく異状のない方が執行します」［川島　2016：p 134］とある。

このように、和船時代のオヒマチの参詣は、産忌や死忌などのケガレを忌避して、別火を焚いたり、炊事の際に用いた水や鍋の煤も人に踏まれないところに捨てるなど、厳粛に行われていたという。また、不漁の際にはオヒマチナオシ（お日待ち直し）と言って、米や酒、魚などを持参して飲食をする習俗もあった。『海村生活の研究』によれば、「即ち不良のとき、漁から帰って来て、神官やオカミサマ（巫女）を頼む。お日待ちを二回も三回もやる船があるが、こんな船が来ると、今までゐた鰹がゐなくなり、或いは釣れてゐたのが急に釣れなくなつたりする。こんなときは他の船から悪態づかれるといふ」［柳田　1949：p 309］とある。

オヒマチで訪れる参詣場所には、黒崎さま・風待さま（崎浜）、山王さま（山王）、地蔵さま（韮之脇）、山の神さま（外畑）、大島神社（お田の神さま）、お愛宕さま（亀山）、お不動さま（磯草）、お熊野さま（田中）、水天宮さま（浦の浜）、地農神さま（下発句）、久須師神社（お薬師さま）、権現さま（木ノ下）、金毘羅さま（要害）［大島郷土誌刊行委員会　1982：p 326］などがあり、島内の様々な神仏を拝んでいた（図 8）。しかしながら、昭和 30（1955）年頃には、「お日待は古くは小舟においてもなされ、元日や出漁期の四月下旬に一斉に行われたが、現在は大型船に限られ時期も一定せずそれぞれの漁船の出船や漁直前の日を選んで行われる」［岡田　1959：p 456-457］とあり、次第に各漁船単位の小規模な習俗へと変化していった。

図 7　オヒマチの格好（『気仙沼市新城地区民俗調査報告書』より転載）

図 8　水天宮さま（浦の浜）

2）オツヤ（御通夜）

参詣費には「五／六　金二円　御中夜入ヒ」（昭和 5 年・万亀丸）、「七／三　金三円九十銭　御昼夜ノ掛リ」（昭和 12 年・共栄丸）などとあり、「オツヤ」（御通夜）を行なっている。

オツヤ（お通夜）と聞くと、仏事などの印象が強いが、本来は寺社などに籠って夜どおし神仏に祈願をする意味で用いられる。たとえば、船大工が真夜中（丑の刻）に、新しく造船した船にオフナダマの御神入れすることもオツヤと言った。また、オツヤに近い習俗として「オヨゴモリ（お夜籠り）」がある。『海村生活の研究』によると「病気、ケガ等の人の平癒を祈願するために、部落の人が揃って神社

にオヨゴモリ（御夜籠りか）をしたり、又付近の神社に参詣して廻ることがあった」［柳田　1949：p 73］とある。

また、船員の代わりに、その妻や家族が参詣に行くことを「ゴサンケ（御参詣）」や、「船のオツヤ」などと言う。出船前後や操業中に沖から不漁の連絡があった時など参詣に行った。

主に船頭の妻が中心となって、一緒の船に乗り組む船員の妻たちが集まって参詣に行く場合が多い。実際に遠洋マグロ船に乗る夫を持つ2名の女性から聞き書きした事例は、以下の通りである。

【事例1】要害地区の女性〈昭和35（1960）年・志津川生まれ〉

気仙沼市内の遠洋マグロ漁船に夫が乗っていて、平成2（1990）年頃まで参詣にあるいた。

嫁に来たころは、おばあさんが出船参詣にあるいていたが、子どもが学校にあるくようになってからは、自分があるくようになった。気仙沼の船頭の奥さんから参詣の連絡が入ると、まずは大島の船員の奥さん達で集まって、良い日を選んで、大島神社、外畑の山の神様、浦の浜の水天宮様、黒崎様などを拝んだ。次の日にマチ（気仙沼）の奥さん達と一緒に車で参詣にあるいた。

最初に、お神明さま（五十鈴神社）を拝んで、高田の竹駒様、唐桑の御崎様などを拝んだ。その際には、「初穂料、お賽銭、お供え（塩・煮干し・スルメ）、お神酒」などを持ち寄って祈禱を受けた後、その場でお神酒を飲んだりして少し休んだ。

祈禱をしてもらった御札は船員の人数分受けてくる。参詣が全て終わると、みんなで食事をして解散した。

【事例2】浅根地区の女性〈昭和21（1946）年・大島生まれ〉

おばあさんが信心深い人で、我が家では昔から朝晩必ず家督息子（長男）が神棚にご飯を供えるのが日課で、今でも毎日欠かさずお供えしている。

私が子どもの頃、おばあさんに連れられて夜中に歩いて大島神社に参詣に行ったことがある。今でも出船の時や沖で漁が無いときは、大島神社でご祈禱をしてもらう。参詣には黒崎様、高田の竹駒様、唐桑の御崎様などにあるく。参詣後には必ず食事をするが、蕎麦やラーメンなど麺類を食べると航海が長くなると言うので絶対に食べない。

それぞれ参詣に訪れる場所は、船会社や船頭、各船員の出身地、個人ごとの信仰などによって異なるが、大島出身の船頭の場合、他地域の船員の妻が、大島出身船員の妻たちに連れられて、島内の寺社を拝んで周ったという話も聞かれた。このようにオツヤの習俗そのものは廃絶しているが、遠洋漁業にまつわる参詣は、現在も少なからず行われている。

現在、大島ではオツヤと呼ばれる習俗は「オジクラサマ（屋敷神）」の祭日に、集落の親類や地縁などが集まって屋敷神を拝んでから飲食をすることを指している。

たとえば、要害の村上家〈鰺浜〉では、オナリ神さま（雷神）を祀っており、旧暦の9月23日には雷神宮の幟を立て、親類や近所を招いてオツヤを行なっている。

また、崎浜でも村上家〈下之平〉の安波大杉神社、村上家〈吹上〉の道祖神、村上家〈横沼の向〉の聖徳太子、村上家〈釜根〉の志和神社、津島家〈横沼の上〉の津島神社などの祭典日があり、現在もオツヤが行われている（図9、図10）。

3）オフナダマ（御船霊）

オフナダマ（以下、フナダマ）は、船の守護神で当地方でも漁師や船乗りの間で広く信仰され

図９　安波さま参詣（崎浜・下之平家）

図 10　安波さまのオツヤ（崎浜・下之平家）

る。和船時代には主に帆柱に祀られることが多く、帆柱の前にある１尺幅のエビス板では金物を使用することが禁忌とされていた。また、カシキ（炊事係）が主にフナダマのお供えなどの世話を行なった。機械船の時代になると、ブリッジ（船橋）に祀られるようになる。

参詣費には「金二円　御船玉入」（昭和５年・万亀丸）、「七／一二　金二円　御船玉祭り」（昭和 10 年・共栄丸）などとある。不漁の際には、オガミサマやシントサマを頼んで、フナダマの祈禱を行なったり、フナダマそのものを入れ替えることもあった（図11）。

『海村生活の研究』には、「船玉のゴシン入れは船下しの朝早く入れる。筒前に銭十二文・サイコロ・五穀を供へる。この賽二つはカヅの木で作り、紙雛と共に入れ、賽は天一地六東五西二北四南三とおき、二二とて中に二を重ねる。舟玉様を入れかへることがある。それはいゝ日を選んで、大工がとり行ふ。大漁があるたびにシルシ（旗）の横に小布をつける。之をオフナダマサマの衣裳といふ。これを落とすと、とれる魚もとれぬ事あり、これを知らぬ裡に落としてゐる事が多いが、オカミサマに聴けば判る。その時はヨケハラヒをして貰ふ（宮城大島）」［柳田　1949：p 290］とある。

また、『宮城県史』第 19 巻民俗Ⅰ（1956）には、大島の浜大漁節（大漁唄い上げ）が採録されており、オシルシ（旗）とフナダマについて唄われている。

〽わが里（大島）は名所な里だエ　居ながらにお船を眺むる

お船玉は大漁なされば　この家ではお恵比寿よろこぶ

お船玉万漁なさる　打出のお恵比寿よろこぶ

港入りに　みな若い衆は総鉢巻で　櫓櫂の拍子　ざっくり揃えて押し込む

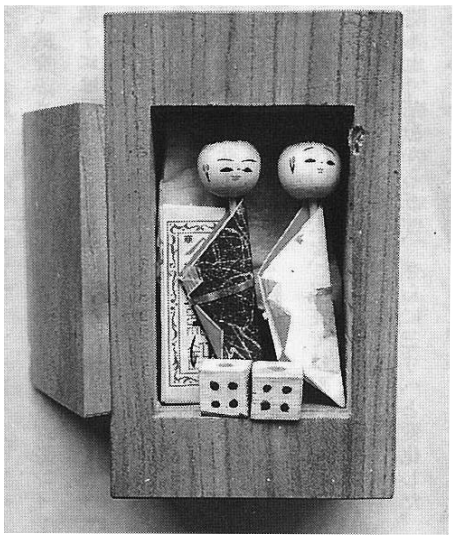

図 11　フナダマ（『気仙沼市史』Ⅶ・民俗宗教編より転載）

図 12 オシルシと大漁飾り（気仙沼市小々汐）（『三陸沿岸の漁村と漁業習俗』（上）より転載）

釣る〳〵で　朝日のお出でに　五尺のおしるし立ておく

五尺のオシルシ立ておく、と歌詞にあるように、「シルシ（旗）」は大きいもので一畳ほどの大きさがあり、「オフナダマノ衣裳」と呼ばれる小さい布を、大漁のたびに着けていたという（図12）。

このような習俗が昭和初期まで残っていたかは分からないが、昭和9（1934）年の万亀丸の参詣費には「一／二八　金三十銭　御旗及御初穂」とある。おそらく、出船前に祈禱をしてもらった大漁旗の代金か、寺社に船名を書いて奉納した布代に用いられたと思われる。実際に布や旗に船名や祈願内容を書いて奉納することは、現在でも行われている。

4）モノマネ

昭和7（1932）年の万亀丸の参詣費に、「金十円　モノマ子入ヒ」という記述がある。「モノマネ」は、農耕や漁撈の様子を真似ることによって、大漁や豊作を祈る予祝儀礼の一つで小正月（正月15日）に行われた。

大島では正月14日の朝に、カツノキ（ヌルデ）を削って作った削り花を、栗の木に吊るした「アワボヘイボ」のことを、昭和40（1965）年頃まで「モノマネ」と言って行っていた。

『カツオ漁』によれば「鮪立では旧暦正月十五日に「モノマネ」と称して、カツオ船の乗組員たちが、船主の家に幟（大漁旗）を立て、「大漁唄い込み」を唄い込み、唄い込んだ後で船主が「ただいますか！」と皆に語ると、若い人たちが「ただいま参りました。オオナムラ出だがら、ヒトナムラ釣りました」と儀礼的な問答をして、船主の家では「銭まき」と称して銭を投げた」［川島2005：p 242-245］とある。

また唐桑では他にも、小正月に子供が行う小原木の「ヘンヨーイ」や、宿の「エビッショ」、舞根の「唄い込み」などの習俗がある。水揚帳に記載があるように、鮪立の「モノマネ」のような予祝儀礼が、嘗ては大島でも行われていたと思われる。大島に伝わる小正月の予祝儀礼としては、「カセドリ」、「ナマコヒキ」、「ナリキゼメ」、「メーダマナラセ」などがあった。

カセドリ

顔を隠して竹きれなどを鳴らして歩いて、家の戸口では声を出さずに餅や米、銭などを貰う行事で、大島では昭和初期に学校を通じて児童の間で禁止になったという。カセドリをして貰った餅を食べると厄払いになると伝わり、昭和10（1935）年頃まで、カセドリをしながら餅を貰いに歩くお婆さんが磯草に居たという。

図13　マユダマ（外畑家）

ナマコヒキ

子供がアワビや板切れなどを結んだ縄を曳きながら、家々の戸口を周って「ナマコ殿のお通りだ、もぐらども去っていろ」と唱えて歩いた。

大島では昭和10（1935）年頃まで行われていた。気仙沼市内でも日時や唱えごとが異なるが、鹿折や新月などの地域も含めて広く行われていた。

ナリキゼメ（成木責め）

主に子供ふたりで行う。一人が栗や柿などの成り木に鉈をあてながら「なるかならねか、ならざら切るぞ」と3回唱えると、もう一人が「なりもす、なりもす」と答えた。昭和40（1965）年頃までは行わ

れていたが徐々に衰退した。

メーダマナラセ（まゆ玉ならせ）

正月11日にミズノキ（ミズキ）を山から伐ってきて、14日に餅を飾りつけて神棚や仏壇などに供える（図13）。現在は小正月の前に出回る色鮮やかなマユダマを買って供える家が多くなった。昔は大漁時に染カンバンと一緒に貰った赤い手拭いを、マユダマにかける家もあった。

５）ネネウオ（根魚）

水揚帳には「根魚代」と「恵比須魚代」のふたつの魚代が支出されており、その用途は明確に区別されている。根魚（ネネオ・ネネヨ）とは、神仏に供える「贄（にえ）の魚（うお）」のことを言う。

参詣費には「金五円　村社根魚代」（昭和6年・万亀丸）、「十／一八　金三円　根魚代村社ニ」（昭和12年・共栄丸）などとあり、カツオ数本を村社である大島神社をはじめ、参詣先の寺社や祈禱をしてもらったオガミサマやシントサマにも奉納している。

一方、恵比須魚（エビスウオ）とは、船主や船元に分けるためのカツオのことを指している。たとえば、昭和7（1932）年の共栄丸の水揚帳をみると「金十円　外畑ニ恵比須魚代」とあり、本家であり船主でもある外畑分の恵比須魚代が支出されている。

この記述ついて当初は、初漁祝いの際に神前に供えるためのカツオのことであると考えたが、水揚額を記録した「鰹ノ部水上」（昭和7年・万亀丸）には、「恵比須魚代　七／二七　金二円四十銭三航海分」、「金五十銭　根魚代」とあり、1航海ごとに、恵比須魚代として8円ほどが支出されている。

このことから、初漁祝いに限らず漁期や時季に応じて、恵比須魚代が支出されていたことが分かる。船員の場合には、親しい人や家族のために持ち帰った分け魚（ワケザカナ）も「引魚代」として、賃金から引かれている。カツオ船の場合には、カツオのホシ（心臓）やワタ（臓腑）なども分ける。ホシは焼くか煮るかして食べ、ワタは塩辛（いわゆる酒盗）などにして保存するため、別け魚を貰う側の需要も多かった。

『海村生活の研究』には、「宮城大島村ではこの生膽をホスといふが、初漁の鰹は漁師たちは食わずに、このホスをつけたまま神に供へ、後に老人が食べると謂う。この初漁祝いをアヅキスゴシと呼び、孕女や産婦がこの魚を食ふと不漁になるとて忌む。即ち孕女が食ふと腹児が死ぬかどちらかに勝負が出来るからだといってゐる」とあり、初漁にホシを神仏に供える習俗や、産忌について言及されている。また、「大島村では鰹漁の最初のものは、船霊様に供へ、カツシキだけで食べるといふ。その理由はカツシキは穢れを知らないからだといはれてゐるが、漁期の初に釣ったものは、如何なる魚の場合であれ、アヅキゴシをして入港してからは船主の家でエベス様に供へ、船主は親類を招いて振舞をする」［柳田　1949：p 305］とある。

アヅキスゴシ（アヅケスゴシ）とは、初漁祝いのことを言う。気仙沼地方では初漁のことを「アヅケ」と呼び、漁期中にあまり漁がなくとも「アヅケばかりしてきた」と言い、どんなに大漁でも、まず神仏に供え船員が食べることは無かったという。

要害の小野寺熊治郎翁〈明治28（1895）年生まれ〉からの聞き書きによれば、「大島の駒形浜ではアヅケスゴシの魚は、年寄りとカシキしか食べられなかった。カカ（妻）を持っている人と他の船の人たちには食べさせないことになっていたという」［川島　2003：p 258-259］とあり、前述の内容と合致している。このように、ある時代までは単なる贈答ということではなく、儀礼的な意味合いも込められたカツオの分配がなされていたことが伺える。

古老たちの幼少期の記憶として、横沼の小野寺のぶ子さん〈大正14（1925）年生まれ〉によると

「幼い頃、沖からカツオ船が入ると、お土産にカツダンゴ（鰹団子）を貰って食べた。なにも無い頃だから、それが美味しくて楽しみだった」と語っていた。

また、高井の小野寺暁さん〈昭和10（1935）年生まれ〉は、「母親が鮪立の生まれで、幼い頃、鮪立に行って浜で遊んでいると大きな釜場があった。そこでカツオの節を湯煎する時には、ホシ（心臓）を一つずつ針金に刺して丸く輪の形にしたものを一緒に釜で煮ていた。それが鰹切場の軒先にぶら下がっており、子どもながらにそれを欲しがると、「大島の孫や、孫や～こーこー」と言われ、おばあさんから口の中にホシを入れられた」と、懐かしそうに回想していた。

図14　中沢旗場

図15　長崎旗場

６）ハタバ（旗場）

昭和8（1933）年の共栄丸の参詣費には、「二／一　金三円　旗場ノ入費」とある。日付については不明だが、おそらく中山の旗場で振る舞う餅や煮しめ、お神酒代などの費用に用いられたと思われる。9月15日に行われる大島神社の例大祭では、オロクソク（お陸尺）に担がれた神輿が島内を渡御する。

各集落には、神輿と担ぎ手が休憩をする「旗場」が設けられ「延喜式内大嶋神社祭典」と墨書された大きな幟が立てられる（図14）。

昭和11（1936）年に、大島村水産業親興会が制定した協定事項には、「十　漁夫傭入期間ハ鰹船ハ九月三〇日ヲ終期トス　此ノ期間中ニ於テ漁夫ハ下船セザルモノトス」とあり、村社の例大祭の時季に合わせてカツオ漁の切り上げ時期が定められている。

戦前までは若い船員が担ぎ手として集まることから、村を挙げた一大行事として行われていた。

担ぎ手や参詣者などは前夜からお籠りをして、神輿が通る道の真ん中には、浜から運んできた白砂が敷かれたという。昔は荒神輿として有名で、「ジダイする」といって、神輿の担ぎ手が海に入ったり、田んぼの稲バセを倒したりと、それは激しいものだったという。現在は神輿をトラックの荷台に載せて集落を渡御し、旗場なども簡略化している。震災以前は、駒形浜から浦の浜まで船渡御を行なったが、いまだ再開されていない。

平成29（2017）年度の例大祭では、〈渡御：大島神社〉→[休石旗場：民宿くぐなり（仲屋）]→[高井旗場：小野寺損害保険事務所]→[長崎旗場：ビーチサイド前]→[新王平旗場：新王平会館]→[崎浜：龍舞崎駐車場]→[駒形旗場：京蔵屋]→[中沢旗場：中沢の浜]→[中山旗場：中屋敷]→[要害旗場：千葉鶴前]→[浅根旗場：浅根漁港]→[浦の浜・田尻・磯草・亀山旗場：フェリー乗場前]→〈還御：大島神社〉という巡幸経路で、神輿の渡御を行なっている（図15）。

７）クジビキ（籤引き）

昭和13（1938）年の共栄丸の参詣費には、「金五十円　村社ノクジ引ニ 」とあり、おそらく大島神社例祭での「お召船」の抽選のことだと思われる。お召船とは、駒形浜から浦の浜までの海上渡御の際に神輿を乗せて、船行列の最後尾に位置する満艦飾をした渡御船のことを言う（図16-a,

b)。昭和 11（1936）年 10 月 28 日付けの「大気新聞」には、お召船が 20 艘も出たとある。

『村上清太郎翁漁業記録（下)』によれば、「切り上げは、漁があってもなくても、旧九月一五日が境でした。この件について申せば、大島神社祭典につき、御神輿を駒形より船にて浦の浜まで、渡御船にて曳き船にてお送り申す、古くからの習慣があったのでしたが、当浜（崎浜）は一週間前から船を停めて待ったのでした。前年の御召船は先駆船で、綱を後ろ船に渡して曳き、また次は抽選で決定してあるので、一定の間隔で曳航したものです」［川島　2016：p 136］とある。

図 16-a　大正 11 年のお召船
（『けせんぬま写真帖』より転載）

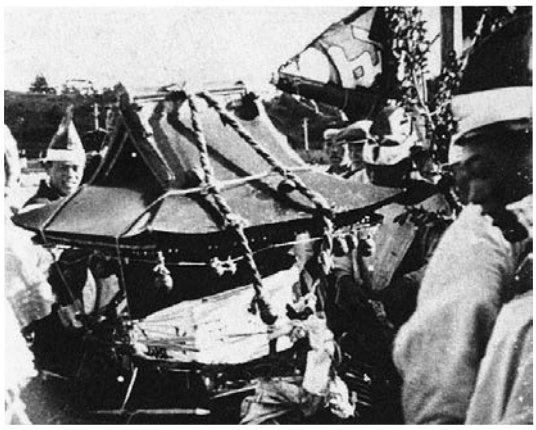

図 16-b　大正 11 年の神輿渡御
（『けせんぬま写真帖』より転載）

８）オセガキ（御施餓鬼）

水死者（海難者）を供養すると、豊漁に恵まれるという伝承は漁村に広く分布している。昔から水死者が流れ寄った浜、水死者を陸に揚げた浜、船や遺体の身元に関係がある浜では、水死者を供養するために、「オセガキ（お施餓鬼)」が行われる（図 17、図 18)。

図 17　施餓鬼法要（昭和 47 年・浦の浜埋立地）

図 18　海の殉難者慰霊塔（気仙沼市階上）

これを大島では「ハマアライ」、唐桑では「ウラバライ」と言って、海難事故が起こる度に集落や浜全体で、直接の水死者を弔うと同時に、訪れる人々の身近な海難者の供養を行なう。

大島では、昭和 40（1965）年頃まで、10 尺程の施餓鬼柱を浜に建て、大きな施餓鬼棚を組み、お念仏や御詠歌を唱えたという。四方を海に囲まれた大島では、ほぼ全戸が参列に訪れることからハマアライは一日かけて行われた。

その際、身内にナガレ（海難者のこと、以下ナガレ）がある家では、不祝儀の表書にタチビ（命日）や、ナガレの戒名などを書いて持っていき、故人の法名や、先祖代々と書いたカーカンジョ（川灌頂）を受け取る。それと一緒に持参した菓子などを供えるが、予め会場で用意されている菓子を、数百円程納めて受け取り施餓鬼棚供えることが多い。今でもハマアライに参列したことを

「オセガキをかいできた」、「ナガレをかいてきた」などと言う。

横沼の小野寺のぶ子さん〈大正14（1925）年生まれ〉によれば、「おらどワラスの頃、ハマアライの時っさ、お施餓鬼棚さ、桶だの置いでおくづど、ナガレのオホトケど海から寄って来て、桶ん中さ入ったりしてっさ、ザブザブど音っこ鳴ったりすんだど。オホトケど、家さ寄っからトノクツ（戸口）っあ、水を入れだ、桶だなんっの置くもんではないと語りした」と、語っていた。

また、大島にはナガレに関する様々な伝承がある。たとえば、オカ（陸）に揚げたナガレに話しかけると、言葉が話せないので、口から血を吐いてかわりに応えるという。

この他にも、ナガレのオホトケの前で悪口を言うことや、発見したのに粗末に扱うと祟りを受けるとされる。実際に崎浜の某家では、昔カレイ網にナガレのホトケが掛かって、そのまま流したため後に祟りがあったという。三陸沿岸では、頻繁にナガレに遭遇するという場所（漁場や航路）が点在している。そこでは昔から、モウレン（亡霊）やボウゴ（亡魂）といった船幽霊譚が語り継がれている。

長崎の水上しげ子さん〈大正15（1926）生まれ〉によると、「おら、ワラス（子供）の頃、夜ひとりで田中浜さ行ぐど、ボウゴさ引っ張られっから、いぐな、いぐなってっさ、オバンッアン（祖母）から語らいした」という。このように、祖母から船幽霊について聞いており、特に田中浜のキゲイソ（鬼界磯）は、昔からナガレが寄る磯場だと言われ、昔はヨイソ（夜磯）に行く機会も多く実際に不慮の事故が多かったという。

参詣費には、「五／三一　金五十銭　御施餓鬼ニ」（昭和8年・万亀丸）、「一二／二七　金一円　御施餓鬼ニ」（昭和12年・共栄丸）などとあるが、参詣費には具体的な内容についての記述はみられない。おそらく操業中に寄港地で遭遇した「お施餓鬼」に支出した可能性も考えられる。

９）宗教者の関与

参詣費には「四／十一　金一円　伊左エ門神徒ニ」（昭和11年・共栄丸）、「浅根御神ニ」、「中信及び御船玉マツリ」（昭和12年・共栄丸）といった民間宗教者である在地のオガミサマ（巫女）や、シントサマ（神人様）たちの名前が出てくる。

（１）オガミサマ

気仙沼地方では、口寄せやカミサマアソバセなどの祈禱や託宣などを行なう巫女を「オガミサマ」と呼ぶ。『海村生活の研究』によれば、「家普請の節ワタマシも行はれる。親戚もよりの人に来て貰ふて酒肴を馳走する。屋根も葺き造作も入れてからワタマシになる。家の中で火を焚き、オカミサマ（巫女）が来てお供えをあげる」［柳田　1949：p 70］とあり、家屋を新築する際にもオガミサマが祭事を行なっていたことが伺える。

また、病気や災難、家族の異変などがあるとオガミサマに占ってもらうことを、「トウデゴト」と言った。漁船の場合には、出船の日取りや漁場の方角なども占ってもらい「カケマブリ（神符）」を受けてから出漁することもあって、帰港後には「ネネ魚」をお礼参りに奉納した。

参詣費にも記載がある「浅根のオガミサマ」について、浅根の村上ひとゑさん〈大正14（1925）年生まれ〉によると、「小さい頃、浅根向のコイに、オガミサマが住んでいた。ハッケオキ（八卦置き）だと言って子どもの頃追いかけて遊んだ。長患いをすると拝んでもらったり、シンルイの人たちが集まってカミサマアソバセをした。そうやって占ってもらって、それをみんな力にしていた」という。たとえば、大正6（1917）年に大島尋常小学校の教員等によって編纂された『大島村誌稿』には、「巫女ニ神様遊バセ、口寄セ等ヲ乞イ、日忌ニ門出セズ、神仏ノ香花消ユレバ災害ア

リト。烏鳴キ声悪シケレバ変アリ、光リ物トブヲ見レバ火災アリト（中略）之ヲ信ジテ神仏ニ祈リ其ノ難ヲ除去セント」［千葉　2007（1917）：p 103］とあり、オガミサマの存在が日常の生活に根差していたことが伺える。

大島では「長崎のオガミサマ」と呼ばれた菅原なつゑ巫女〈明治 26（1893）年―昭和 56（1981）年〉を最後に、オガミサマの習俗は廃絶している。

（2）シントサマ

気仙沼地方では専ら神職を表わす呼称として用いられているが、本来は在野の民間宗教者を指す意味でも使われていた。大島でも昭和初期から最近に至るまで、シントサマと呼ばれる在野の宗教者が多くみられた。廻舘では千葉伊左エ門翁（伊左エ門シント）が、出雲大社教の神職として活動しており、同家の敷地内に出雲神社を建立している。また、白幡千代吉翁（千代吉シント）も、大工をしながら御嶽教の神職として活動し、同家の敷地内に御嶽神社を創建している。この他にも、高井では宮大工をしていた千葉友吉翁（中信のシント）や、浅根の村上吉一翁（浅根のシント）などがいた。

崎浜の津島家〈横沼の上〉では、昭和 26（1951）年に出雲大社より分霊を勧請して「出雲大社教津島支教会」を設立している。同家の津島新市・正人両氏は、津島シントさまと呼ばれていた。

このような在地のシントサマの他にも、他所から来た流浪の宗教者も少なからず存在した。

図 19　山の神祭典を描いた絵馬（外畑家所蔵）
＊右端は外浜のシントサマ（寶性院）と伝わる。

たとえば、『回顧録 おりおりの記』（伊東三郎著）には、伊東家〈田迎〉に寄宿していた祈禱師の及森徳次郎翁について回想されており、及森翁の祈禱によって不動明王の取子になった人たちが、崎浜に多くいたことが記されている。この及森翁の死にあたっては、長命寺・村上家〈上の沢〉・伊東家〈中大浜〉でお世話をしたとある［伊東　1987：p 3-4］。

また、浦の浜の菊田家〈塚木浜〉では、昭和 20（1945）年以前に伊勢の御師だというシントサマが寄宿していたという。島内で祈禱や家相占いなどを行ない、よく酒に酔って寝ていて、子供たちが悪戯をすると、「この、戯け者」と大声で叱責するので、「タワケシント」と呼ばれていたという。

このように、大島では在野の民間宗教者が戦前まで出入りしており、既存の信仰を受容しながらもさまざまな影響を与えていた（図 19）。

5. 氏神・村内参詣

大島では「ウブスナ詣り（産土詣り）」と言って、元日の「元朝詣り」や出船前の「出船詣り」など、島内の寺社や小祠などを参詣する習俗がある。『大島村誌稿』には、「毎月朔日、十五日、二十八日ニ産土神社ニ参拝シ以テ家内安全ヲ（以下省略）」［千葉　2007（1917）：p 102］とあり、朔日・15 日には参詣に行った。このように、毎月 1・15・28 日などにオツクラ詣り（内倉詣り）といい、本家の屋敷神を拝みに行く習俗があった。この日にはアズキ飯を炊いたり、オジクラサマ（屋敷神）を拝んだ。参詣の際には、サンケブクロ（参詣袋）やコンブクロ（米袋）と呼ばれる手製の巾着のような袋に、オハネリ（洗米）と塩で清めた小銭などを入れ賽銭として寺社に供えた。

図20　ツタコ正月

図21　大島神社

図22　万亀丸鰹船船中が奉納した絵馬（大島神社）

正月にはサンケモチ（参詣餅）という小さな丸餅や切り餅を供えたり、晦日正月（1月30日）と、二月正月（2月1日）は、「ツタコ正月」といって、ツタ（木蔦）・スギッパ（杉の葉）、コブノキ（接骨木）を束ねた「ツタコ」を供えた（図20）。また、ご節句には、菖蒲とヨモギの葉を束ねたもの供えた。旧暦6月15日の「お天王さま」には、キュウリを供えたという。このように、時季に応じて吉日をみながら、家々の屋敷神や路傍の小祠に至るまで参詣にあるいた。

参詣費には村内の寺社として、大島神社は「村社」、久須師神社は「薬師様」と記されている。

また、「誓亀山光明寺（真言宗智山派）」、「医王山長命寺（同宗）」、「東月山西光寺（曹洞宗）」の3ヶ寺を参詣費では「三ヶ所」と記載しており、「四／十八　金十一円五十銭　御膳金三ヶ所分」（昭和6年・万亀丸）などとある。

それぞれの寺には、「波切不動尊（光明寺）」、「成田山不動尊（長命寺）」、「金毘羅大権現（西光寺）」が祀られており、主に祭日などに御膳金や祈禱料が納められている。

この他にも崎浜の風待さま、安波さまの祭礼である「崎祭り」など、大島村内をはじめ近隣の寺社にも参詣に訪れている。

1）大島神社

亀山の中腹に位置している延喜式内社で、大島全体の氏神として信仰をあつめている（図21）。オダノカミサマ（太田ノ神）と呼ばれており、漁業神的性格よりも田の神の性格が強い。気仙沼地方では、オサナブリ（お早苗ぶり）やオカリアゲ（お刈上げ）が終わった後に、大島神社（オダノカミ）に参詣に行く習俗があった。

また、昭和初期までカツオ船の終漁時期は、大島神社の例祭にあたる旧暦9月15日頃が切り上げとなっていた。参詣費には「四／二三　金十円　村社ニ寄進」（昭和8年・万亀丸）、「四／十七　金二円　村社参詣金」（昭和10年・共栄丸）などとある。

大島神社は、昭和10（1935）年に再建されており、その記念碑の碑文には「此ノ工費実ニ弐千有餘円ニシテ専ラ地方ノ有志者ト船舶ト及本村民ノ寄附ニヨル（以下省略）」とある。船舶とはカツオ漁船を指しており、氏子総代・世話人の中には、小田中山家の小山文市氏も名を連ねており、昭和6（1931）年には「万亀丸鰹船船中」が、カツオの絵馬を奉納している（図22）。

また、浦の浜の菊田千松氏〈昭和19（1944）年戦死〉が遺した「開運丸餌買日記」によると、

「昭和 18（1943）年 8 月 6 日。山王、外浜に行って様子聞けども餌なし。大島神社に大漁祈願して貰うべく 5 円置く。小鯖に行くも餌なし。船が入って来たら来てみるがよいと。十円御神酒銭置く。大島より細浦に行き一泊する」［千葉　2011：p 273］とある。

餌買いに、長崎の村上家〈山王〉、外浜の小松家〈外浜の上〉のイワシ網に行った帰路に、大漁祈願のために、大島神社に初穂料を納めていることが分かる。小松家では大島神社の宮司を務めており、このように漁業者とも密接な関係にあったことが伺える。

2）久須師神社

田尻のオヤグッサマ（お薬師さま）と呼ばれており、別当の菊田家〈下ノ崎〉を中心として、現在も旧暦 4 月 8 日には祭典が行われている（図 23）。昔はこの祭典の前後に、カツオ船が出漁した。縁起によれば、奥州菊田郡塩谷城（福島県いわき市）に居住していた菊田兵衛太郎義直（下ノ崎家 7 代）が、元応 2（1320）年に比叡山より薬師如来を拝受し、その孫の清太郎義演が応永 20（1413）年に坊ノ沢に「薬師堂（善逝堂）」を建立したとされる。

図 23　久須師神社

その後、下ノ崎家から分かれた「東亀山東光院医王寺（天台宗）」が、薬師堂の別当寺となり、文明年間（1469-86）から天明 4（1784）年まで 10 代続いたが廃絶し、以後下ノ崎家が別当を継承した。明治 3（1870）年には久須師神社と改められ、大己貴命を祭神とした。

昭和 12～13（1937-38）年の共栄丸の参詣費には、「五／六　金十五円　薬師様キフ」とある。昭和 11（1936）年に、久須師神社では隣家からの失火によって仁王門の屋根が焼けて大破しており、宮大工の千葉友七と千葉友治郎が修理にあたっている。同年 5 月 16 日に竣工しており、おそらく修繕費用として寄付したものと思われる。

3）光明寺

浦の浜にある真言宗智山派の寺院で「誓亀山光明寺」という。仁和（885-888）年間に寛空法印の開山と伝わる古刹で、大島の半数が檀家となっており、小田中山家でも同寺を菩提寺としている。

境内には波切不動尊が祀られており、特に漁業者の信仰が篤く、毎年 4 月 28 日の祭日には、航海安全と大漁満足を祈る護摩祈禱が行われる。

図 24　長命寺成田山

4）長命寺

崎浜にある真言宗智山派の寺院で「医王山長命寺」という。安永 9（1780）年の「大島村風土記御用書出」には、延暦元（782）年に開成法印の開山とあるが諸説あり、文政 5（1822）年に駒形屋敷の小野寺伊兵衛が記した「窺奉申上候御事」（駒形家文書）によれば、慶長 2（1597）年に近江国から巡錫してきた弁栄法印の開山とある。また、同寺では成田山不動尊を祀っており、大正 11

図25　失せもの絵馬（西光寺金比羅堂）

表10　西光寺金比羅堂の失せ物絵馬

No.	対　象	法　量（cm）		描　画　材	奉　納　者
		縦	横		
1	包丁	25.5	36.2	和紙・墨	第二十二神明丸
2	包丁	18	28	和紙・墨	奉納　第三勢和丸
3	包丁	15	30	和紙・墨	奉納　第八勇□□
4	包丁	25	35.8	和紙・鉛筆	奉納　平島網
5	包丁	20	25	木材・ブリキ	奉納　小野寺一男
6	ハンマー	16	23	和紙・着彩	奉納　平島網
7	ヘビ	25	36.7	和紙・墨	及川ひと江
8	ヘビ（対）	28	37	和紙・墨	高橋えみ□
9	ヘビ（対）	25.5	36.8	和紙・墨	道新
10	ヘビ（対）	27.8	42.5	和紙・墨	水上くに子
11	ネコ	37.8	26.8	和紙・墨	
12	（不明）	25.5	35.5	和紙	

西光寺金比羅堂での調査を基に筆者作成。

（1922）年に25世片山運峻和尚が、村上家〈荒谷ノ下〉の金比羅丸で千葉の成田山まで行って勧請を受けてきたと伝わる。旧暦3・10月28日の祭典日には護摩祈禱が行われ、奉納演芸などもあって参詣者で賑わう（図24）。

昭和32（1957）年に、崎浜を調査した岡田精一によれば、「漁業集団儀礼には「お日待」と「成田さん」（長命寺）の祈願儀礼がある。但し後者は全島の舟元（約50名）が長命寺の本堂に集合して豊漁安全の祈願をするものである」［岡田　1959：p 456］とある。

5）西光寺

要害にある曹洞宗の寺院で「東月山西光寺」という。天文12（1543）年に片浜（現在地は岩月寺沢）の別所山満福寺3世自翁宗源和尚開山と伝わる。その後一時荒廃したが、慶長年間（1596-1615）に気仙郡矢作（現陸前高田市）から来住した千葉家〈竹之下の上〉一族が、同地の海岸山普門寺から鏡心在天和尚を迎えて中興開基し現在に至る。境内にある金比羅堂は、元文4（1739）年に村上儀三郎が勧請したと伝わり、以前は旧3月10日に祭典が行われていたが、現在は6月頃に行われ、奉納演芸として要害七福神が行われる。

また、金比羅堂には「失せもの絵馬」が奉納されている（写真21）。「失せもの絵馬」とは、金物などを海中に落とした場合、失くしたものを絵に描いて寺社に奉納する絵馬のことで、三陸沿岸の漁村に分布している［川島　1997］。西光寺の金比羅堂には、包丁・玄能・ヘビ・ネコなどを描いた失せもの絵馬が壁に貼られており、漁業者の海上禁忌に対する信仰の深さが感じられる（図25）。

6）崎祭り

共栄丸の参詣費には「四／四　金五円　崎祭御初穂　神山」（昭和10年）、「四／一二　金五円崎祭御初穂」（昭和11年）とある。「崎祭り」とは、大漁祈願や集落の安寧を祈る催しとして、明治29（1896）年に黒崎島に建立された黒崎神社の祭典が起源であるという。現在は崎浜地区の自治会組織である「美和会」の総会時に、崎祭りの名残として黒崎神社の方向へ遥拝が行われている。

昭和12（1937）年の支那事変の前後までは、風待神社別当の伊東家〈荒屋敷〉と安波大杉神社別当の村上家〈下ノ平〉をはじめ、集落を中心として盛大に祭典が行われ、両社に1年交互に法印神楽が奉納され、餅まきやカルメ飴売りもあったという［気仙沼・大島漁村文化研究会　2012］。

平成10（1998）年頃まで津島神社の宮司がお祓いを行ない、荒屋敷では御神酒とタケノコ、下之平では野菜をそれぞれ持ち寄って、大漁や豊作の祈願として供え物を小舟に乗せて海へ流していた。また、美和会を通して毎戸に神札も頒布されていたという。

7）風待神社

崎浜の風待平に鎮座しており、カドマッツァマ（風待様）と呼ばれている。和船時代に風待平は日和見を行なう場所で、岬すぐ下に待島という小島があり、カツオ船を待機させた場所だと伝わる。安永9（1780）年の「大島村風土記御用書出」には、「村鎮守 風松明神社」とあり、海上守護神につき、漁師申合わせによって5月の吉日を選んで神事を行うとある。

古くから大島のカツオ漁において重要な神であったことが伺える（図26）。

大正7（1918）年には「風待神社」の石碑が建立され、大正元（1912）年には島内の無各社合祀によって、久須師神社に合祀されている。

図26　風待神社

一、村鎮守　風松明神社
一、小名　横沼
一、勧請　誰勧請と申儀并年月共ニ相知不申候事
一、社地　東西拾八間　南北九間
一、社　南向三尺作
一、地主　荒屋しき權七
一、別當　右同人
一、祭日　隔年五月日不定
　但海上守護神ニ付往古ゟ一村漁師申合隔年五月之内吉日相撰神事仕候事

図27　安波大杉神社
（崎浜・下之平家）

図28　黒崎島

8）安波大杉神社

安波信仰は、茨城県稲敷市阿波に鎮座する「安波大杉神社」にはじまり、その信仰圏は利根川以北の太平洋沿岸の漁村に多く分布している。同社では倭大物主櫛甕玉命を主祭神として祀り、大己貴命・少彦名命の2柱を併祀している。気仙沼地方では、元文4（1739）年に安波山に勧請されている。大島では安波ヶ丘自然公園（旧大島灯台）に、昭和初期まで鳥居と社があって、祭日には神楽が奉納されたという。現在は村上家〈下之平〉の屋敷裏に祀られており、ご神体は同家の屋内に祀られている。旧暦3月・9月27日の祭日には、同家でオツヤ（お通夜）が行われ、横沼集落の親類をはじめ近所からも参詣に訪れる（図27）。

9）黒崎神社

大島の最南端に位置する「黒崎島」に鎮座しており、島そのものが信仰の対象となっている（図28）。昔は沖に出る際は必ずハチマキを取って、船上から参詣をして出漁したと伝わり、現在でも気仙沼湾から出漁する遠洋マグロ船は、ここでフライ旗を降ろす。

文献上の最も古い記述は、延宝3（1675）年の「御巡検記録」（外畑家文書）に「黒崎明神」とあり、延宝年間以前から祀られていたと推測される。

安永 9（1780）年の「大島村風土記御用書出」によれば、祭日は「風松明神社」と同日に行うとある。古くは現在の竜舞入口の駐車場辺りで、祭礼が行われていたと伝わる。

『海村生活の研究』には、「前兄島にはヨリ木の神様があって、その横の黒崎は漁の神とて鰹釣りに行く時には垢離をとって必ず拝む。その序でにヨリ木の神を拝むのでヨリ木の神は大変立腹されてゐるといふ（宮城大島）」［柳田　1949：p 326］とあり、大前見島の寄木神と黒崎神社との関係性について、非常に面白い報告がなされている。

上記の海村調査を行なった守随一は、昭和 12 年（1937）年の 7 月から 8 月にかけて、本吉郡大島村・唐桑村（現気仙沼市域）、岩手県気仙郡綾里村・越喜来村・吉浜村（現大船渡市域）の 5 カ村を調査している。この時の採集手帳によると、大島村では小山良治（大島尋常小学校訓導）と片山運峻（長命寺住職）の両氏から聞書きを行なっている。

また、黒崎島にある祠は幾度か流失しており、昭和 47（1972）年に大時化で流されたため、崎浜美和会とワカメ組合が協力し、昭和 50（1975）年に石祠を再建している。

震災後の事例としては、新しく造船したモーター船が、日の丸を掲げて黒崎島の周りを回遊しながら、海にお神酒を注いで乗り初めをしている光景がみられた。

一、黒崎明神社
一、社地　南北十間半、東西八間
一、社　南向貮尺作
一、別當　當村天台宗東光院
　右ハ海中岩島之上ニ相立勧請並年月共二相知不申鳥井額長床等無之祭日之儀者
　風松明神社同日ニ一同相祭來候間社地間數並御社別當斗御書上仕候事

図 29　御崎神社

10）御崎神社

気仙沼市唐桑町崎浜（旧唐桑町）に鎮座しており、大海津見神・素戔嗚尊・日本武尊を祭神として祀る。気仙沼地方では「御崎さま」と呼ばれ、正月 15 日の祭典には、はじき猿やサッパ船などの縁起物が露店に並び多くの参詣者で賑う（図 29）。

社伝によれば、日向国外浦（現宮崎県日南市郷地区）に鎮座する日之御崎神社を勧請したもので、飫肥城主伊東祐時の後裔が戦乱を避けて、神璽を奉じて唐桑村津本に上陸して小社を建立する。

その後、延慶 2（1309）年（元年とも）に、現在地に遷座したと伝わる。近世は御崎明神として別当千手院が務めた。明治 2（1869）年に日高見神社と改められたが、昭和 46（1971）年に現社号の「御崎神社」に改称した。

古くから御崎神社は、近郷からの信仰も集めており、特に祭典前の宵祭りには露店が出ることから、大島からも船で参詣に行ったという。

たとえば、嘉永 5（1852）年から文久 2（1862）年頃にかけて、外畑屋敷の小山治右衛門が記した「嘉永五年子ヨリ覚付帳」（外畑家文書）には、「同未六月岩尻照谷ノ藤屋官兵衛二男聟ニ貰取、同年十一月六日ニ婚礼致シ、翌年申ノ正月十五日唐桑村御崎へ参詣ニ遣シ候処、浪人被致候」とある。外畑家では、安政 6（1859）年に岩尻村から貰った婿養子が、婚礼の翌年の安政 7（1860）年、

御崎神社参詣に行って浪人になったと記述されている。この後、婿養子は実家に帰参し、松前に渡って御公儀へ奉公したとある［神奈川大学日本常民文化研究所　2007］。

また、『和船の海』によれば「御崎では大立浜（鳥居の下の浜）に寄り、何人かの船番（ふなばん。留守居）を置いて神社に参詣にあがります。「かしき」は先の幟をはずして持ち、四丁艪主は「はちこ」、「おはねり」（供米、饌米）、賽銭を持ち、船頭以下数人あがるわけです（中略）護摩焚きには持って行った幟を神前に供え、神主から祈禱してもらいます。護摩料は三円くらいでした。終わると神社側の接待で、みんな分（全員分）のご馳走が出され、お酒がつけられます」［小山 1973：p 24］とある。参詣費には「八／八　金十円五十銭　御崎様御膳金」（昭和 8 年・万亀丸）、「七／二四　金二三円二十銭　御崎様参詣」（昭和 12 年・共栄丸）とあり、近郷の参詣場所と比較して、とりわけ参詣金を多く支出していることから、おそらく祈禱後の直会に費用が掛かったと推測される。

また、小田中山家は御崎岬を眺める位置にあり、そのような景観的な要因なども信仰の背景にあることが想像できる。実際に田中浜の山王社や亀山には、御崎神社の遥拝石がある。

11）五十鈴神社

気仙沼市魚町の神明崎に鎮座する。天照皇大神・大海津見神（竜神社）・素盞嗚神（八雲神社）を祭神として祀る。通称「お神明さま」と呼ばれており、境内には気仙沼湾に海苔養殖と製塩を伝えた猪狩新兵衛翁を祀る「猪狩神社」がある（図 30）。

図 30　五十鈴神社（神明崎）

参詣費には「金二円四十銭　神山ニ」（昭和 8 年・万亀丸）、「四／三十　金五円　神山祈禱料」（昭和 12 年・共栄丸）などとあり、同社の宮司を務める神山家のことを指している。

五十鈴神社では、旧暦 3 月 27 日の春季例祭に、気仙沼漁業協同組合が祭主となって「浦祭り」を行ない海上安全と大漁を祈願している。この「浦祭り」は、カツオ漁の漁期前の予祝行事として、カツオ船の船主の間から始まったとされる。

元々は漁協主催の「竜神祭」が母体となっており、気仙沼港においては昭和 10（1935）年頃に始まったとされる［川島　2003：p 300］。昭和 13（1938）年の共栄丸の参詣費には「四／三十　金五円　神山乗出祭り」とあり、おそらく「浦祭り」のことだと推測される。『大島村誌稿』には「漁人ノ沖ニ出ヅルヤ、其ノ安全ヲ祈願スルノ余リ、其ノ妻子老幼ヲ問ハズ神ニ詣ジテ専心海上ノ安全ヲ祈リ、無事帰宅スルヲ望ムハ切ナリ、特ニ浦祭ト称シテ神楽ヲ奏シ以テ神ニ海上ノ安全ヲ祈願スル祭日アリ、イト盛大ニ挙行セラルナリ」［千葉 2007（1917）：p 102］とあり、崎浜で行われていた「崎祭り」のことを指していると思われる。

12）観音寺

気仙沼市本町にある天台宗の別格本山で「海岸山観音寺」という。山形県の立石寺と岩手県平泉の中尊寺とともに、東北三灯の一つとされる。

図 31　観音寺山門

創建は和銅年間（708-714）まで遡り、嘉祥3（850）年に慈覚大師が堂宇を整備して、海岸山観音寺と改めたと伝わる（図31）。

昭和11（1936）年の共栄丸の参詣費には、「五／二九　金一円十銭　観音寺様ニ」とあり、何かしらの催しがあったと思われる。

13）少林寺

気仙沼市三日町にある曹洞宗の寺院で「指月山少林寺」という。寛永年間（1624-1644）に、新城村の宝鏡寺第9世一峰松柏和尚が天台宗の玉泉寺から、指月山少林寺と改め中興開山したと伝わる。昭和8（1933）年4月8日の「カツオノ部」の参詣費には、「金五円　少林寺御祈禱会」（共栄丸）、「金三円　少林寺祈禱会ニ」（万亀丸）とある。同寺では、金比羅権現（鎮海明王）を祀っており、その祈禱料として支出したと思われる。

6. 遠隔地信仰

和船時代からの参詣地として、金華山沖の漁場に至るまでの航路上に位置している歌津の津龍院、金華山をはじめ、内陸部にある塩竈神社や青麻神社、竹駒神社などへ参詣に訪れた。

また、南部参詣（早池峰山・岩手山）や最上参詣（出羽三山）といった遠隔地にも足を運んでおり、参詣費には「山形参詣用」（昭和7年・共栄丸）、「女川参詣」（昭和11年・共栄丸）などとあり、機械船時代においても必ず参詣に訪れている。

昭和に入って神奈川県三崎町（現三浦市三崎）が根拠地となると、参詣費には「大山参詣」（昭和11年・共栄丸）、「鎌倉参詣」（昭和12年・共栄丸）など、関東圏の寺社への参詣も増えてくる。このような参詣費に散見される遠隔地と、関東圏の参詣地について具体的に紹介しながら、若干の考察を加えたい。

1）津龍院

南三陸町（旧歌津町館浜）にある曹洞宗の寺院で「歌建山津龍院」という。寺伝によれば、応永16（1409）年に全照満廓上人によって、天台宗寺院として田束山の麓に創建されたという。その後、永禄6（1563）年に啓南乾迪和尚によって曹洞宗に改められた。

通称は「館のお寺」と呼ばれており、参詣費には「金五円　舘御膳金」（昭和7年・万亀丸）と出てくる。境内には、明治35（1902）年に第20世天雲龍雄和尚によって山形県鶴岡市の善宝寺より龍王尊を勧請した「龍王堂」が祀られる。南三陸沿岸地域をはじめ漁業者の信仰を集めており、毎年正月3日には「動力船組合祈禱会」が行われている。

図32　三山碑・塩釜塔（右端）

2）塩竈神社

塩釜市に鎮座している陸奥国一の宮で、塩土老翁神・経津主神・武甕槌神を祭神として祀る。古来より航海の守護神として信仰されており、宮城県をはじめ全国から参詣者を集める。和船時代には、金華山参詣をした後には塩釜に入港して、2、3日滞在しながら、遠島（牡鹿方面）の船から沖の様子を聞いたり、仙台見物などに行ったという［小山

1973：p 27]。

参詣費には「五／一二　金十四円五銭　塩釜社御膳」（昭和 8 年・万亀丸）、「十一／十八　金五円塩釜社御膳金」（昭和 10 年・共栄丸）などとあり、漁期の始めに必ず参詣されている。

崎浜の小山家〈深沢口〉の前には、文化 5（1808）年に建立された「塩釜塔」がある（図 32）。碑面には塩釜講中として 45 名の名が刻まれており、当時は塩釜参詣が盛んに行われていたことが伺える。この供養碑は以前、壇の平の近くにあって眼下に金華山を望める高台に位置していた。

3）青麻神社

仙台市宮城野区岩切の青麻山に鎮座しており、天之御中主神・天照大御神・月読神・常陸坊海尊を祭神として祀る。日本各地にある青麻神社・三光神社の総本社であり、社家の穂積氏が水運に関係することから海上安全の信仰を集めている（図 33）。

参詣費には「金十八円十七銭　青麻山御膳金」（昭和 5 年・萬亀丸）、「七／二二　金五十銭　三光様ニ」（昭和 12 年・共栄丸）などとあり、塩釜に入港すると塩竈神社ともに参詣された。

図 33　和船時代の神札（左端が青麻神社）

4）竹駒神社

宮城県岩沼市と岩手県陸前高田市に、それぞれ竹駒神社がある。参詣費には、「五／一二　金七円二十銭　竹駒様御膳」（昭和 8 年・万亀丸）、「四／七　金三円五十銭　竹駒様ニ御祈禱料」（昭和 12 年・共栄丸）などとあり、どちらにも参詣に訪れている。

岩沼市稲荷町に鎮座する竹駒神社は、倉稲魂神・保食神・稚産霊神を祭神としており、宮城県を中心に「竹駒稲荷」として、五穀豊穣・商売繁盛の信仰を集めている。2 月の初午大祭は、初午の日から 7 日間に渡って行われる（図 34）。

図 34　竹駒神社（宮城県岩沼市）

陸前高田市竹駒に鎮座する竹駒神社は、倉稲魂神・豊受姫神を祭神としており、仙台平野に面した内陸の岩沼よりも近い距離にあることから、気仙沼地方では盛んに参詣されている。

崎浜の小野寺家〈駒形〉と小野寺家〈東〉では、それぞれ屋敷神として竹駒稲荷を祀っている。小野寺家〈駒形〉の竹駒稲荷は、陸前高田の竹駒さまの分霊だと伝わる。祭日の 2 月の初午には昔は親類でオツヤを行ない、古くはお神楽も行われたという。同家の敷地内には、昭和 46（1971）年に再建された稲荷社があり、「正一位稲荷大神」扁額が掲げられている。これは江戸後期に当地方で活躍した書家の豪良道人が揮毫したもので、おそらく豪良が気仙沼地方に滞在した文化 6（1809）年から同 14（1817）年にかけて奉納されたものだと推測される。

小野寺家〈東〉では、屋敷裏の長命寺墓地の近くに稲荷社を祀る（図 35）。文久 2（1862）年の棟札が現存しており、現在の社は平成 4（1992）年に再建されている。昔は親類でオツヤを行なったが、現在は長命寺成田山祭典に合わせて幟を立て参詣だけ行なっているという。

和船時代には両家ともカツオ船を経営しており、大正元（1912）年に駒形家では、大島初の機械

船である祥海丸（20トン・20馬力）を静岡県の下田から導入している。

5）金華山

牡鹿半島の先端に位置する有人島で、中央には標高445メートルの金華山がそびえている。中腹には黄金山神社、山頂には大海祇神社が鎮座しており、近世期には真言宗大金寺・竜蔵権現とそれぞれ呼ばれていた（図36）。

金華山沖は黒潮と親潮の合流する日本有数の漁場として知られ、古くから弁財天を祀る霊山として信仰を集め、「金華山講」が三陸沿岸をはじめ各地で盛んに行われた。

参詣費には、「五／十　金十円十銭　金華山御膳金」（昭和8年・万亀丸）、「四／八　金十五円二十銭　金華山御膳金」（昭和9年・共栄丸）などとある。

和船時代までは金華山周辺が、大島のカツオ船が出漁する最大距離であり、且つ良好な漁場でもあった。『大島誌』によれば、金華山に着くと亀磯から幟やハチコ、竿などを持って上陸して、神社近くの滝の水で水垢離をとって身を清めてから参詣をした。その際には、護摩を焚いてもらい御札も受けてきた。金華山参詣後には塩釜に入港して、塩釜神社や青麻神社を参詣してからは、主に仙台見物などをしたという［大島郷土誌刊行委員会　1982：p 328］。

たとえば、明治26（1893）年の「鰹船方勘定調書」（大要害家文書）には、半蔵という船方が、船頭から金華山小遣い3銭を前借りした記述がみられる。この記録からも、金華山参詣には信仰的な要素も然ることながら、カツオ漁が本格的に始まる前の余暇や娯楽的な意味合いも含まれていたと言える。

また、「嘉永五年子ヨリ覚付帳」（外畑家文書）には、「閏五月二日浦ノ政治郎子共孫七　石ノ巻川口ニテ金花山参詣ニ参リ候砌舟主舟宿方ノ都合十六人乗合　内七人溺死致候　大島ノ者ハ孫七斗死ス」とあり、安政4（1857）年閏5月2日に、金華山参詣へ向かう18人が乗った船が、石巻の川口で転覆し、それに乗り合わせた浦方の政治郎の子である孫七を含む7名が溺死している。この記録からも、当時から盛んに金華山参詣に訪れていたことが伺える。

図35　竹駒稲荷（崎浜・東家）

大島の巳待ち信仰

安永9（1780）年の「大島村風土記御用書出」（大要害家文書）によると、長命寺の境内に弁財天堂があったことが記されている。同寺には寛政12（1800）年の弁財天堂の棟札が伝わっている。

> 一辨才天堂
> 一堂南向壹間四面
> 一本尊　木像座像御長壹尺六寸　但作者相知不申候事
> 一祭日　九月十三日
> 右ハ當村真言宗醫王山長命寺境内ニ相立勸請并年月共ニ相知不申鳥居長床等茂無之別當右長命寺ニ而堂本尊祭日斗書上申候事

図36　亀山から見た金華山

表 11　大島地区の巳待塔

No.	年　代	碑　文	地　区（場　所）
1	宝永 元 年（1704）	己巳奉供養	磯草（不動堂）
2	宝永　4 年（1707）	己巳奉供養辯財天	高井（大島小学校）
3	宝永　4 年（1707）	奉供養己巳本地辯財天宇賀神将	崎浜（壇ノ平長命寺墓地）
4	正徳　3 年（1713）	己巳奉供狼	外浜（地蔵堂）
5	正徳　5 年（1715）	己巳奉供養	浦の浜（光明寺）
6	享保 元 年（1716）	己巳奉供養	要害（西光寺）
7	享保 14 年（1729）	己巳奉供狼	崎浜（壇ノ平長命寺墓地）
8	享保 17 年（1732）	己巳奉供狼	田尻（久須師神社）
9	寛保 元 年（1741）	己巳奉供養	浦の浜（光明寺）
10	宝暦　4 年（1754）	己巳奉供養	浦の浜（経壇）
11	宝暦　4 年（1754）	庚申己巳奉供養	田尻（久須師神社）
12	宝暦　4 年（1754）	己巳奉供養「以下不明」	浦の浜（光明寺）
13	宝暦　9 年（1759）	己巳待供養	要害（要害の鼻）
14	明和　3 年（1766）	庚申己巳奉供養	田尻（御霊神社）
15	明和　4 年（1767）	庚申己巳奉供養	要害（西光寺）
16	安永　3 年（1774）	巳待	浦の浜（経壇）
17	天明　3 年（1783）	己巳供養	浅根（大島医院の後）

『気仙沼市史』Ⅷ資料編に所収を基に、筆者が採録したものを加筆。

図 37-a　壇ノ平の巳待塔

図 37-b　壇ノ平の巳待塔

このような弁財天信仰の一つに「巳待講」がある。「巳待ち」とは、己巳の日の巳の刻に弁財天を祀る信仰的な寄り合いのことで、近世中頃から大島でも盛んに巳待塔が建立されている。

『気仙沼市史』Ⅷ資料編（5 章金石資料・1 供養碑）所収の大島地区 83 基の内、巳待塔（己巳庚申塔も含む）は 16 基収録されている。これは大島地区の石碑全体の約 22% にあたり、宝永年間（1704-1710）から天明年間（1781-1788）にかけて、特に盛んに信仰されていたことが伺える（表11）。

たとえば、崎浜の壇ノ平にある長命寺の墓地には、宝永 4（1707）年と享保 14（1729）年の年号が刻まれた巳待塔が、金華山を望める場所に位置している（図 37-a, b）。

また、大島小学校の校庭にある校木の大きな黒松の傍に、宝永 2（1705）年の「庚申供養塔」と、宝永 4（1707）年の「巳待供養塔」のふたつ石碑があり「巳神さま」と呼ばれる。明治 42（1909）年に、現在の場所に小学校が開校する以前は、浅根の村上家〈中〉と村上家〈新屋〉の畑があった。新屋の伝承では、穀物を荒らすネズミから、畑を守るために蛇の神を祀ったのが、巳神さまだと伝わる。今では拝まれることも無くなったが、時代が変わっても、いつも校庭から中央を行きかう人たちをはじめ、大島のこどもたちを見守っている。

6）室根山

岩手県一関市（旧室根村）にある標高 895 メートルの山で、中腹には室根神社が鎮座しており、「本宮」と「新宮」の 2 社がある（図 38）。平成 6（1994）年に室根村教育委員会が設置した由来書きによれば、「本宮」は養老 2（718）年に元正天皇の勅命を受けた鎮守府将軍大野東人が、蝦夷降伏の祈願所として、紀州（和歌山県本宮町）から熊野大社の御神霊を迎え祀ったものとある。

また、「新宮」は正和 2（1313）年に陸奥守護職葛西晴信が、奥 7 郡（磐井・江刺・胆沢・気仙・本吉・登米・牡鹿）の鎮守として、紀州（和歌山県新宮市）から、熊野速玉大社神霊を迎え祀ったものとある。唐桑では、室根権現が養老 2（718）年に紀州の牟婁郡音無川から船で北上した際に、鮪立から上陸したという伝承に因んで、舞根から潮水を竹筒に汲み神前に捧げる。このように、気仙沼市内からも神役として神事に出仕する家々があり、室根神社の崇敬者と氏子の範囲は、岩手・宮城

図38　亀山から見た室根山

の両県にまたがる気仙地方に広がっている。

閏年の翌年の旧暦9月中頃の3日間にかけて行われる「室根神社特別大祭マツリバ行事」は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。参詣費には、「金三円　室根山」（昭和5年・万亀丸）、「五／六　金三円　室根山ニ」（昭和12年・共栄丸）などとある。古くから室根山は、農業・漁業の神として信仰されており、山頂が平坦であるため気仙沼地方の漁師からは、「ヤマバカリ（山測り）」の目印の一つとされてきた。亀山の山頂には室根山を遥拝する石があり、正月の元朝参りなどには、オハネリ（洗米）が供えられている。

7）大槌稲荷神社

岩手県上閉伊郡大槌町に鎮座しており、大槌漁港を望む高台に位置している。昭和7（1932）年の共栄丸の参詣費には「金二円　御膳金大槌稲荷様」とあり、詳しい日付は記載されていないが、おそらく4月前半の出船前に参詣に訪れたと思われる。

共栄丸の船長を務めた前川稲四郎氏〈明治29（1896）年―昭和48（1973）年〉は、大槌町の生まれで、大正6（1917）年に華洋丸（気仙沼町日出菊治郎所有）の機関士となって大島に移住した。

戦後の昭和22（1947）年には、第1栄丸を建造し、続いて第2栄丸（鉄鋼・184トン）、第3栄丸（木造・243トン）と、次々に経営を拡大して大きく躍進した。

南洋マグロ漁船の先駆として、地域の漁業に大きく貢献をしたが、昭和36（1961）年には漁船経営から完全に退いた。共栄丸の船頭となった前川氏は、この頃36、7歳の働き盛りであり、これからの自身の将来の大きな展望を祈りつつ、故郷である大槌の稲荷神社に参詣に行ったことが想像される。

8）閼伽井嶽

福島県いわき市のほぼ中央に位置する標高605メートルの霊山で「赤井岳」とも言う。山頂には水晶山常福寺（真言宗智山派）があり、通称「閼伽井嶽薬師」と呼ばれる。

昭和7（1932）年の万亀丸の水揚帳には、日付は不明であるが、「金十円　赤イ岳参詣金」とあり、小名浜港に水揚げした際に参詣に行ったと思われる。

和船時代には夜間の泊め船をする際に必ず、カシキがお灯明を上げる作法があり、その唱えごとに閼伽井嶽の名が出てくる。お灯明とは、「カツオ船が沖で「泊め船」をするとき、夕暮れどきに、カシキが船のトモから海に臨んで立って行われる。右手にはサッカを三本、藁で束ねて、それを竹に挿したものを持ち、そのサッカに火を点してから高く差し上げ、御祈禱を唱え上げた後に、空に向かって火を放す儀礼である［川島　2003：p172］。

この時、火を灯す「サッカ」とは薪を削った削り花のようなもので、カシキは炊飯と海上での祈禱をするために、お灯明用の縄を30尋用意したという。

水上亀吉翁（長崎）の手記よれば、「鰹船で漁場につくと、夕方必ず、「カシギ」は漁の祈禱する事も、これ又、習慣の一つとなっていた。まず、楢（ナラ）の焚木（マキ）を花のように数本削って束ね、二尋（ヒロ）位の竹竿にさし、火をつけ、船尾に立ち「沖の国、高日権現様に、お燈明、ご祈禱差し上げます。明日の夜明には、出来漁さしかかり、底通し底群（ナブラ）十万八千、良き

新漁（アライ）を下りゃせ」と三回繰り返し、「とう恵比寿さま」と言って、天高くほうり上げ、火は海に落ちる」［大島海友会　1991］とある。

また、川島秀一が唐桑の古老から採録した「お灯明」について、以下に事例を挙げると

（1）「お灯明、南無ご祈禱、アゲエダケのお薬師様に申し上げえす。明日の朝はデキヨウ、ハセガカリ、底ドーシ、底ナブラ、大ナムラ、茄子南蛮の色になって来るように。ヒトサンドウにカメ干してタテフネするところ」唐桑町鮪立の浜田徳之翁〈明治 34（1901）年生まれ〉

（2）「お灯明、南無ご祈禱、閼伽井嶽のお薬師様さ申し上げます。明日の朝は底ナムラ・赤ナムラ・デキウオ・ハセガカリ・つかかってタテフネするところ」唐桑町馬場の小松友松翁〈明治 38（1905）年生まれ〉といった文言があった。

川島の解説によれば、元来は島根県隠岐島（隠岐郡西ノ島町）の焼火神社（焼火権現）に、主に廻船（北前船）などが航海安全を祈る信仰が、季節労働者として廻船の船頭を兼ねた三陸北部の漁師等によって当地まで伝播したという。漁撈用和船の動力化が沖へと漁場を開拓するとともに、沖通りの廻船の習俗が衰退した廻船に代わり、カツオ漁船に伝承されるようになった［川島　2003：p 176］。このように三陸沿岸においては、前述した隠岐島の焼火神社の信仰的な役割を、閼伽井嶽が担っていた。

7. 代参詣り

出船前後や休漁期間などに大漁祈願や航海安全を祈願するため、船の代表として船主や船頭が遠隔地の寺社へ代参に訪れている。特に気仙沼地方では、岩手県の五葉山・早池峰山・岩手山などを登拝する「南部参詣」と出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）、善宝寺などを参詣する「出羽参詣（最上参詣）」といった習俗があった。

参詣費には、岩手県紫波町の志和神社や山形県鶴岡市の善宝寺の参詣費用として、旅費や賽銭、御札代などの支出が記載されている。また、神奈川県三崎町（現三浦市三崎）が根拠地となると、関東地方の参詣地を訪れる機会も増えたことが伺え、参詣費には栃木県鹿沼市の古峰山・神奈川県伊勢原市の大山・長野県の善光寺・愛知の豊川稲荷などの寺社が散見される。

これら遠隔地の寺社への代参には、船主や船頭だけに限らず、水揚げをする漁港の周辺に先廻りをしている餌買人たちが代参している。代参者を含めて船員は一つの講組織のような存在で、「万亀丸船中」や「共栄丸船中」といったように、船単位で祈禱や御札を受けていたと思われる。

1）志和神社

岩手県紫波郡紫波町に鎮座する「志和稲荷神社」のことで、五葉山・早池峰山・岩手山などを登拝する「南部参詣」の帰路に参拝した。昭和 12（1937）年の共栄丸の参詣費には、「十／一七　金十五円　志和神社ニ参詣」とあり、大島でも戦前までは通過儀礼の一つとして、南部参詣が盛んに行われていた。このように講を組んで登拝する行為を、「オヤマガケ（お山がけ）」といった（表 12）。

オヤマガケの行程について、浦の浜の小松岩吉翁から聞き書きをしている佐々木安治氏の回想によれば、「南部参詣の場合、明治の末頃までは大島から唐桑の石浜に行き、船で広田に渡り細浦、大船渡、盛、日頃市を経て、五葉山・お石上山・六甲子山（六角牛山）、早池峰山・岩手山を登拝して、盛岡に出て一関経由で帰路についたという。また、オヤマガケの登拝者の家では、毎日必ず神棚に灯明をつけて無事を祈願したという［大島地区老人クラブ連合会　2009（1976）］。

表 12　大島からの早池峰山登拝者数

年　月　日	地区	人数	職業	講員数	登拝者の年齢
大正　2　6/26	長崎	20			
大正　3　2/15	崎浜				
	要害				
	田尻	3			
大正 11　7/27	田尻	7	漁業	20 人講中	24.25.26.28.30.35
7/27	浅根	5	漁業	26 人講中	17.20.21.33.35
7/29	磯草	5	漁業	26 人講中	21.22.29.30.31
7/29	高井	6	大工		
大正 13　7/21	浅根				

『気仙沼市史』Ⅶ・宗教民俗編所収の早池峰神社所蔵『気仙郡本吉郡東磐井郡講中』（大正 2（1913）年～昭和 3（1928）年）を基に作成した表から、大島の登拝者のみを抜粋した。

図 39　早池峰山塔（気仙沼市磯草）

図 40　志和稲荷神社（崎浜・釜根家）

図 41　山王社の石碑（長崎・山王家）

五葉山（1.351 メートル）は、住田町・釜石市・大船渡市にまたがる霊山であり、気仙沼地方では、ヤマバカリ（山測り）に用いられる山で沖合から見えなくなる地点を、「五葉つぶし」や「大檜山つぶし」と言った。また、石上山（1.038 メートル）・六角牛山（1.294 メートル）・早池峰山（1.914 メートル）は「遠野三山」とよばれ、特に早池峰山は、宮古市・遠野市・花巻市の 3 市の境に位置している霊山で、古くから信仰をあつめている。磯草には、文化 13（1816）年に建立された早池峰山の供養塔がある（図 39）。

崎浜の村上家〈釜根〉では、志和神社を屋敷神として祀っている。旧暦 10 月 19 日の祭日には親類や近所数軒を招いてオツヤを行う（図 40）。

古くは竜舞崎（現あずまや付近）の西側に鎮座していたと伝わり、昔の古老たちは近くの磯場を「お志和様の下」と呼んでいたという。

2）善宝寺

山形県鶴岡市にある曹洞宗の寺院で「龍澤山善宝寺」という。曹洞宗三大祈禱寺の一つに数えられ、東日本の漁村に広い信仰圏を持っている。

共栄丸の参詣費には、「金二十二円五十銭　山形参詣用ニ」（昭和 7 年）、「金十六円五十銭　善宝寺参詣金（船頭）」（昭和 12 年）などとある。

長崎の山王社には、天保 2（1831）年に建立された庚申塔・三山供養塔・金毘羅塔など 4 基の石碑がある。言い伝えによれば、村上家〈台〉の先祖が出羽三山を参詣の記念として建立したと伝わる。碑文からは、村上家〈山王〉の先祖である忠太夫と円之丞という人が中心となって建立したことが伺える（図 41）。このように、古くから漁民から信仰されており、現在も気仙沼地方では漁業者が多く参詣に訪れており、善宝寺の大漁旗を掲げた船もよく見られる（図 42）。

3）守谷地蔵

共栄丸の参詣費には、「五／一四　金十円　守谷山参詣金」（昭和 11 年）、「五／一九　金六円五十銭　守や地蔵尊詣り」（昭和 12 年）などとあり、昭和 11（1936）年から 13（1938）年にかけて

「守屋地蔵」という名称が出てくる。守屋地蔵は、登米市東和町米谷にある「米谷秈荷神社」裏手の墓地に位置している。『東和町史』によれば、明和3（1766）年に獄中で憤死した守屋文右エ門を祀った延命地蔵尊で、勝利や栄達の成功、家内安全、商売繁盛などの願いを叶える地蔵として信仰をあつめ、終戦まで県内外から参詣者が多かったという。4日・14日・24日が縁日で、特に出征兵士の家族が参詣に訪れるようになると、世に知られるようになったという［東和町史編纂委員会　1987：p 930］。

図 42　善宝寺の旗（気仙沼市鮪立漁港）

気仙沼地方では、口寄せの跡に青森県下北の恐山の代わりとして、登米市中田町にある長徳山弥勒寺（真言宗智山派）に訪れる人が多く、おそらく昭和10（1935）年代に当地方でも、何らかの理由で信仰されていたと思われる。

8. 関東地域の参詣地

機械船時代に入ると次第に、操業を行なう漁場の範囲も拡大していった。それと並行して漁船員の技術力も向上していった結果、島内からの出稼ぎ船員も増加しいった。昭和6（1931）年に調査された「他道府県へ出稼者調査ニ関スル件」（大島村役場文書）によれば、北海道の函館方面から静岡県の焼津方面まで、大島村からの出稼ぎ者がいる。この内、神奈川県三浦半島の先端に位置する三崎町（現三浦市三崎）には、12名ほどの船員が出稼ぎに行っており、三崎を根拠地とする気仙沼地方のカツオ一本釣り船やマグロ延縄船への出稼ぎ者は徐々に増加していった。

これに呼応して、三崎では昭和7（1932）年に宮城県本吉郡・牡鹿郡のカツオ・マグロ遠洋漁船によって編成される宮城県出漁団を迎えており、万亀丸と共栄丸も三崎を根拠地として操業をしている。共栄丸が操業を行なっていた昭和13（1938）年の三崎出漁船の分布を見ると、漁船の総数においては小型船を主体とする高知県が64隻で1位を占めているが、漁船総トン数においては大型遠洋漁船を多数有する宮城県が4000トンを超過して第1位を占めている［古川　1959：p 3］。

三崎は戦後になると、遠洋マグロ専用船の漁業基地として大きく発展する。昭和31（1956）年の三崎の遠洋漁業事業所関係の労働者の出身をみると、徳島・三重・高知・千葉に次いで、宮城県本吉郡が5番目に多く104名を輩出している。さらに地域別にすると、宮城県大島から34名と極めて多くの漁船員を輩出している。大島出身者の中には、三崎に定住して三浦市の市議会議員となった塩瀬厚氏（旧姓村上・崎浜生まれ）などもいた。

この時期の水揚帳から参詣費の支出をみると、神奈川県では鎌倉の建長寺の半僧坊大権現、伊勢原市の大山など、房総半島では館山の安房神社、小湊の誕生寺、銚子から近い茨城県鹿島の鹿島神社などがみられる。前述した通り、代参には船主や船頭の他に、先回りをして餌イワシを買い付けている「餌買人」が、船主や船頭の意を汲んで、寄港地周辺の寺社へ代参に訪れている。

餌買人の実態については、『増補　浦のあけくれ』（千葉勝衛著）所収の「餌買い日記」に詳しいが、水揚帳にも餌買人の記述が「餌代」や「参詣費」の費目の中に散見される。

たとえば、昭和7（1932）年の共栄丸の水揚帳の「餌代」の費目をみると、「四／二二　金一円五十五銭　鰯見運賃」、「五／二四　金九円六十銭　鰯生人旅賃」、「五／二五　金十三円六五銭　エバ買旅ヒ」などとある。このような餌買人の存在にも触れながら、関東地方の参詣地について取り挙

げたい。

1）大山

神奈川県伊勢原市に位置する大山（1.252 メートル）は、相模平野のほぼ中央に位置している。

主に関東、東北地方南部に信仰圏を持っており、中腹には「大山阿夫利神社」と「雨降山大山寺（大山不動）」が鎮座する。江戸中期には大山御師の布教による「大山講」が各地で組織され、特に関東圏では大山参りが盛んとなった。昭和 11（1936）年の共栄丸の参詣費には「金二十円 大山参詣 船頭」とあって、船頭が代参している。

2）半僧坊

鎌倉市にある建長寺（臨済宗建長寺派大本山）の鎮守で、明治 23（1890）年に第 235 世住持貫道周一禅師が、静岡県浜松市の方広寺（臨済宗方広寺派大本山）から勧請した。

参詣費には「四／四　金八十二円十七銭　金華山、塩釜、青麻、安房、半僧坊御膳金」（昭和 10 年・共栄丸）や、「二／二八　金七円　鎌倉参詣」（昭和 12 年・共栄丸）などとある。三浦半島をはじめ相模湾沿岸では、現在も半僧坊の大漁旗を掲げた漁船も多くみられ、漁業者からの信仰をあつめている。おそらく根拠地である三崎の漁撈信仰の影響を受けたものと推測される（図 43）。

図 43　半僧坊の旗（横須賀市長井漁港）

3）安房神社

千葉県館山市に鎮座しており、本社に天太玉命・天比理刀咩命・斎部五部神、摂社（下宮）には天富命を祀る。毎年 8 月 10 日に例祭が行われている。

昭和 9（1934）年の共栄丸の参詣費には、「十一／二四　金二十五円五十銭　安房神社参詣」とある。館山には水揚げの他、館山湾北部に位置する船形（当時は安房郡船形町）で、燃料やイワシ生餌を補給するために寄港している。

4）成田山

千葉県成田市にある、真言宗智山派大本山の「成田山新勝寺」は、天慶 3（940）年に寛朝僧正の開山と伝わり、関東屈指の不動信仰の聖地として信仰される。大正 11（1922）年には、崎浜の長命寺に不動尊が勧請されており、成田山共敬講として現在も島内から信仰をあつめている。

たとえば、昭和 10（1935）年の共栄丸の参詣費には、「四／三十　金二円　成田山御祈禱料」、「五／二一　金二十三円　成田山参詣金」、「二／二一　金十五円　成田山参詣」とあり、成田山だけで 3 回程出てくる。おそらく参詣と明記されている支出については、実際に成田山新勝寺を訪れているもので、少額の支出に関しては長命寺の成田山のことだと推測される。

また、「餌買い日記」には「五月二二日、曇。五時ころ旅館を出て浜に来るも船は来ず。バスにて網代の餌見に来る。トンボ餌には上物ならん。刃の二階で休んでいたら本船来る。船長は成田山参詣に行く。米や木を刃に頼む。（船で一泊）（昭和 16 年・国宮丸）」［千葉　2011：p 260］とある。

5）誕生寺

千葉県鴨川市（旧天津小湊町）にある日蓮宗の大本山で「小湊山誕生寺」という。建治2（1276）年に、日家上人が日蓮聖人の生家跡に「高光山日蓮誕生寺」として建立した。その後、明応7（1498）年の明応地震、元禄16（1703）年の元禄地震と2度にわたる地震と、津波の影響によって現在地に再建されたと伝わる。日蓮聖人生誕の地である「鯛の浦」では古来より殺生が禁じられ、現在も禁漁区が設けられており、「鯛の浦タイ生息地」として国指定特別天然記念物に指定されている。

図44　鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）

また、小湊港は近世期から東廻り航路の避難港として整備され、古くからの寄港地として漁船も多く停泊した。昭和9（1934）年の共栄丸の参詣費には「六／二六　金九円　参詣金誕生寺ニ」とあり、水揚げや補給の際に参詣に訪れたと思われる。「餌買い日記」には、「7月16日。朝食後雨降りの中を誕生寺参詣に行く。相変わらず海上安全、大漁祈願を祈る（昭和16年・国宮丸）」［千葉2011：p 264］とある。

6）鹿島神社

茨城県鹿島市に鎮座する常陸国一の宮で、武甕槌命を祭神として祀る。古くから武神として崇拝されており、千葉県銚子に入港した際に参詣に訪れたと思われる。昭和12（1937）年の共栄丸の参詣費には、「六／七　金十三円九十銭　鹿島様参詣」とある（図44）。

7）古峰山

栃木県鹿沼市に鎮座しており、日本武尊を祭神として祀る。特に火除けに霊験があり、盗難除け・海上安全・五穀豊穣などの信仰もあつめる。近世中期頃から東日本を中心に、「古峰講」や「古峰ケ原講」といった講組織が発達し代参が盛んに行われてきた。

たとえば、気仙沼市新月芦戸にある古峯神社は、文化2（1805）年に新月村の文助夫妻を中心として古峯講中12名が建立しており、気仙沼地方でも信仰が盛んであったことが伺える。昭和11（1936）年の共栄丸の参詣費には、「八／十一　金二円五十銭　古峯山祈禱」とある。

8）豊川稲荷

愛知県豊川市豊川町にある曹洞宗の寺院で、「円福山豊川閣妙厳寺」という。嘉吉元（1441）年に東海義易禅師によって創建され、一般的には「豊川稲荷」の名で呼ばれ、日本三大稲荷の一つに数えられる。昭和5（1930）年の万亀丸の参詣費には、「八／十一　金二十円　豊川様ニ」とある。支出額からみれば、実際に愛知県まで足を運んでいる可能性も高い。

しかし、この時期の水揚げ記録を見ると漁期の前半は、東京や三崎に水揚げをしていることから、三崎街道沿いに位置する横須賀市の大滝町商店街（三笠ビル商店街）にある「豊川山徳寿院（豊川稲荷横須賀別院）」に参詣に訪れたとも考えられる。

9）弁天様

昭和10（1935）年の共栄丸の参詣費には、「九／一九　金二円　弁天様キフ」とある。

また、餌代の費目には「九／一九　金四百二十円三十三銭　生代　館山分店」とあり、おそらく千葉県館山市に鎮座する「鷹ノ島弁天宮」に参詣に訪れたと思われる。

川島によれば、昭和31（1956）年に鷹ノ島弁天宮に奉納された玉垣の奉納船名22基内、13基が宮城県籍で、圧倒的に当地のカツオ船の奉納が多いことを指摘している[川島　2015：p 182-184]。また、『航跡二十年』所収の村上重雄翁の手記によれば、昭和24（1949）年6月、館山で餌待ちをしていた時、ちょうど弁天様のお祭りの朝に、身投げした若い女を拾った小舟が、自分たちの船の後ろに着いたので、若い船員たちは女の死体を見に行ったという。それから何航海も不漁が続いたため、一時大島に帰港して浦の浜の光明寺で、女の供養を営んだ。その後、船では毎航海連続して大漁をしたという。

手記の最後で村上翁は、「線香の一本も上げずにただ肌を見られたという女の一念が漁を止めたものと思っています」と締め括っている［大島海友会　1991：p 55-56］。

このように根拠地や寄港地の様々な寺社へ、大漁祈願のための参詣を行なう一方で、その土地で遭遇した予期せぬ出来事や船員の思わぬ行為が、その後の不漁や災厄の招いた要因として操業中に語られる例は多くみられる。この事例からも、当時のカツオ船では禁忌や俗信に対する意識や信仰が非常に強かったことが伺える。

9. おわりに

以上のように、本稿では昭和初期のカツオ船の水揚帳から参詣費を取り挙げ、その支出の内訳を三つに類型化しながら、当該地域における漁撈習俗と遠隔地信仰について考察してきた。

万亀丸と共栄丸が活躍した昭和初期は、大正期からの機械船の進展に伴って、漁場の範囲が急速に広がり、気仙沼地方では木造機械船から鉄鋼船へと移行していく転換期でもあった。

また、共栄丸の乗組員の顔ぶりを見てみると、従来の和船時代からの血縁や地縁的な関係性に基づいた人員に限らず、無線通信機器や動力機関を扱える人材が求められ、他地域からの出稼ぎ船員も複数名みられる。一方で、船頭をはじめとした中堅クラスの船員のほとんどは、和船時代からの経験や知識も兼ね備えており、旧来の漁撈技術と新たな技術革新とが拮抗し合う過渡期であったとも言える。

たとえば、大正の中頃に石油発動機が導入され、動力化によって櫓割りから解放された船員の多くは、「ネマったままでもあるくにいい（座ったままでも航海ができる）」と喜びあったという［小松 1974：p 248］。そのような漁船の省力化や労働事情の変化は、船員たちの労働観念や規範意識ばかりで無く、信仰といった精神文化にも少なからず影響を与えていたと思われる。

しかしながら、昭和初期の水揚帳には操業経費として「参詣費」という費目が設けられており、さまざまな予祝行事をはじめ近郷村内や遠隔地、寄港地への参詣など、その使途が明瞭に記帳されている。それらを考察することによって、当地における漁撈習俗の一端を垣間見ることが出来たかと思われる。

また、船主や船元、船頭をはじめ一般の船員、餌買い人などの職制によって、参詣に訪れる範囲にも少なからず差異がみられる。この傾向について、本稿ではあまり具体的に触れることが適わなかったが、種々方々への参詣には航海安全や大漁祈願といった多幸を神仏に祈るばかりでは無く、当然ながら施餓鬼供養のように海難者への供養や追善といった心意も伺える。

本稿では、昭和初期のカツオ漁業の事例について取り挙げたが、大要害家文書や外畑家文書の近世後期から明治期の和船の水揚帳のなかにも参詣金が散見される。これらの資料の整理や翻刻作業

にも同時に取り組みながら、現代の沖合漁業における漁撈習俗についてもアプローチすることを、今後の課題としたい。

参考文献

伊東三郎 1987『回顧録 おりおりの記』非売品
歌津町史編纂委員会 1986『歌津町史』宮城県歌津町
大島海友会　1991 『大島海友会創立 20 周年記念 航跡二十年』大島海友会
大島郷土誌刊行委員会　1982『大島誌』大島郷土誌刊行委員会
大島地区老人クラブ連合会　2009（1976）『子孫に伝えたい大島のむかし話』非売品
岡田重精　1959「部落構造と儀礼―宮城県大島字崎浜の場合―」『東北文化研究室紀要』第 1 集　東北大学文学部東北文化研究室
小野寺佑紀　2016「気仙沼大島における漂着神の信仰」『東北民俗』50 輯　東北民俗の会
小野寺佑紀　2017「海難者を祀る習俗 ―気仙沼地方の事例を中心に―」『東北民俗』51 輯　東北民俗の会
小山亀蔵　1973『和船の海』唐桑民友新聞社
川島秀一　2003『漁撈伝承』法政大学出版局
川島秀一　2005『カツオ漁』法政大学出版局
川島秀一　2015『安さんのカツオ漁』冨山房インターナショナル
川島秀一　2016「村上清太郎翁漁業記録（上）」『東北学』07　はる書房
川島秀一　2016「村上清太郎翁漁業記録（下）」『東北学』08　はる書房
神奈川大学日本常民文化研究所　2007 『神奈川大学日本常民文化研究所保管文書 目録・史料集 小山家文書』神奈川大学日本常民文化研究所 担当田上繁
気仙沼・大島きずな情報センター協議会編　2017『気仙沼大島の民話・伝説』同協議会
気仙沼・大島漁村文化研究会　2012 『はやわかり気仙沼・大島漁村誌』同研究会
気仙沼町誌編纂委員会　1953『気仙沼町誌』片岡英三
気仙沼市史編さん委員会　1995『気仙沼市史』Ⅷ・資料編　気仙沼市
気仙沼市史編さん委員会　1994『気仙沼市史』Ⅶ・宗教民俗編　気仙沼市
小松宗夫　1974『海鳴りの記―三陸漁業のあゆみ―』宮城県北部鮪鰹漁業協同組合
千葉勝衛　2007『大島村誌』私家出版
千葉勝衛　2011『浦のあけくれ―増補版―』私家出版
東北歴史資料館 1984『三陸沿岸の漁撈習俗』（上巻）　東北歴史資料館
東和町史編纂委員会　1987『東和町史』宮城県東和町
独立研究法人水産総合研究センター中央水産研究所・神奈川大学日本常民文化研究所　2009 『水産総合研究センター所蔵古文書目録―村上茂夫家文書―（宮城県気仙沼市）』独立研究法人水産総合研究センター中央水産研究所
古川史郎　1959 「神奈川県三崎漁港の発達」『地理学評論』古今書院
柳田國男編　1949『海村生活の研究』日本民俗学会
和歌森太郎編　1969『陸前北部の民俗』吉川弘文館
崎浜美和会　2013『創立記念 和のあゆみ 115 年』非売品
宮城県史編纂委員会編　1956『宮城県史』19（民俗第Ⅰ）宮城県史刊行会
宮城県鼎ヶ浦高等学校社会班　1966『昭和 41 年度気仙沼市新城地区民俗調査報告書』宮城県鼎ヶ浦高等学校
日本常民文化研究所 水産庁資料整備委員会 1950『漁業制度資料目録』第 1 集全国篇Ⅰ　日本常民文化研究所水産庁資料整備委員会
日本大辞典刊行会編　1972『日本国語大辞典』小学館
夢ぽけっと・編　2017『水上不二詩集 海はいのちのみなもと』光陽メディア

〔震災救出資料〕
大島漁協文庫所蔵（1972）「施餓鬼法要　昭和四十七年七月二日　浦ノ浜埋立地」
大島漁協文庫所蔵（1933）「震嘯災害商工業復旧」